Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

5861
2144
no.4

大正十年九月廿九日印刷納本
大正十年十月 三 日發 行

UNUA KAJERO OKTOBRO 1921

LA SEMANTO

種蒔く人

□行動と批判□

第一年 第一巻 第一号

創刊號

種蒔き社

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたもの丶運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對するこの狀態の續く限り人間は人間の敵である。この間に妥協の道はない。然りか否かである。眞理か否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のい　ない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に、結合と分離とが生ずる。

見よ。僕たちは現代の眞理のために戰ふ。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために革命の眞理を擁護する。種蒔く人はこゝに於て起つ——世界の同志と共に！

種蒔き社

執筆家

秋田雨雀　有島武郎
馬塲孤蝶　アンリ・バルビユス
エドワド・カーペンタ　クリスチアン・コルネリセン
江口渙　ワシリイ・エロシエンコ
藤井眞澄　藤森成吉
福田正夫　アナトル・フランス
ポール・ジル　長谷川如閑
林倭衛　平林初之輔
石川三四郎　神近市子
加藤一夫　川路柳虹
宮地嘉六　宮島資夫
百田宗治　小川未明
ポール・ルクリユ　白鳥省吾
富田碎花　山川菊榮
吉江喬松

目次

本欄
思想家に訴ふ（題言）……種蒔き社……一
石炭がら（小說）……山川菊榮……二
炎の海（詩）……福田正夫……六
罷業の朝（句）……山上正義……九
勞働運動と智識階級……（評論）……村松正俊……一〇
爛れた眼（詩）……白鳥省吾……一九
刄に刺されて（詩）……松本淳三……二一
三人の乞食（小說）……沼田流人……二五
比叡の雪（感想）……宮島資夫……三〇
批評
評論（正俊）—小說（洋文）—劇（弘二）—童話（孝丸）—詩（小牧）……三六
世界欄
勞農露國の大飢餓—赤色露國と學者—エスペラントかイドか—瑞西より……四九
地方欄
爭議の跡を訪ねて—赤光會便り……五三
雜
古事記神話の新研究について（橋井淸之助）—三四郎氏から—如是閑氏から—雨雀氏から—インテリゲンツイアの僞らざる感想（中央公論より）……五四

思想家に訴ふ

とうとう默つて居れぬ時が來た。

それは資本主義や帝國主義に呪はれたロシアの民衆が、更らに自然の敵し難い災禍に魅せられ、草や木とともに凋死しやうとしてゐる。

我々はかうした運命も共産主義の破綻に起因したものだと云ふブルジョア的な考で、この問題を默殺することが出來やうか。君主政治の光榮の日に、ブルジョア共和政治の光榮の日に、嘗て饑饉はなかつたらうか。これは主義や思想の問題ではない。生きるためにパンを求むる人間の問題だ。そして我々の叫びは常にパンの略取ではなかつたか。

ロシア人の苦みは昨日や今日の歷史ではない。一世紀も前から殆ど生血を吸はれるほど、よぼよぼになるまで鞭打れたこの民衆が、やがて七年の間、外敵と内爭に劇しく戰ひ、その上かうした不可抗力との最後の試練を思ふと、我々はどうしていゝのか。革命苦はブルジョア治下の生存苦より更らに悲痛な事實を何日か我々も知る時代があるだらう。

そして我々は何をしたか。コルチヤツクやセミヨーノフなどの、今では見る蔭もない反革命者のために、飽まで貪慾な財閥のために、軍閥のために、我々は何をなしだか。我々はこの凡ての罪惡の前に、恰度ヨーロツパの主義者達が、こん度の戰爭に反逆したやうに瞑目しはしなかつたか。

とうとう默つて居れぬ時が來た。

我々はまたしても、このまゝで、他所ごとのやうに、無產階級のために戰つてくれた人達のために、又現に戰ひつゝある人達のために、世界革命の先驅者のために、他人であらねばならぬか。

とうとう默つて居れぬ時が來た。

誰が赤色ロシヤは我々の光であると言はなかつたか。そう言つた我々の言葉はかりそめの言葉であつたか。無產者のためにパンを叫んだのも、みんなかりそめの叫びであつたか。これからさき無產者は誰れを信ずればいゝのか。

とうとう默つて居れぬ時が來た。

勞働者には勞働者の任務があり、農民には農民の任務があり、兵士には兵士の任務があるならば、思想の勞働者たる思想家にも又思想家の任務があらねばならぬ。

思想家よ、汝の行動と汝の叫びによつて、瀕死せんとする同胞に、パンと醫藥を與へしめよ。

汝、思想家よ、汝の叫びが常に空虛の悲哀を血と汗の持主たる永遠の奴隷に與ふるに過ぎないものならば、さらば、汚れたる歷史の屈服者よ、永遠の瞑想家よ、敗慘者よ、さらば、机上の思想家よ、汝が永劫の墓に眠れ！

東167804

石炭がら

山川菊榮

一

地底の薄氣味惡い冷たさが、這ふやうに肌を侵して來る。

刻々に死を待つてゐる五六人は、互にピッタリ寄り添うてヒソ〳〵話してゐた。石炭に塗れてどす黒い、蒼くやつれた彼等の顔を、消え殘つたランプの仄白い炎が、チラ〳〵と照らし出した。ツイ近くには、赤く、黒く、石炭の粉と血に塗れた險しい男の死顔が見えてゐた。少し向ふには、ダラリとした腕が投げ出されてゐたが、その指はなほビク〳〵と、ひきつるように時々動いた。石盤石が崩壞して推高く積つてゐる下からは、細い血の流れが滲むやうに滴り出て、段々に生き殘つてる人々の方へ流れて來る。彼等は少しづゝ後退りして、遂に壁側の所まで退いてしまつた。そこでしつかり圍まり合つてゐたが、赤い流れは徐かに、音も立てずに、とう〳〵そこまで、彼等を追ひかけて來た。

彼等は、とても助かる生命でないのを知つてゐた。有毒瓦斯に襲はれぬうちに、此處僅かの時間内に彼等を地上に救ひ出すことは、人力の及ぶ所でなかつた。けれども、彼等の眼に現はれた心痛は、あながち死の恐怖をのみ語るものではなかつた。

一番年若の、十三四になる少年は父の腕手を掴んだ。

『阿母さんと子供達に遺書をしておかうよ。』

『遺書だつて？　何を書かうつてんだ?!』と父親は唸るやうにいつた。『一文無しでどうして五人の餓鬼を喰はせていくか、遺書のしやうも無えじやねえが。』

『でも、』と少年は健氣に云つた。『でも私等が死ぬのを恐がつちや居ねえつて書いとけば……』父親はもうポケットをさぐつて鉛筆を出しかけてゐた。他の者もそれに倣つた。『そりや死ぬなあ恐かねえが、奴等これからどうして喰つていくかと思ふとなア、』と父親は息をついた。

彼等は狹い中に蹲んで、有り合せの紙切れをポケットから出して、それを出來るだけ滑かに延ばしながら、膝の上や石

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

盤石の破片の上などで何か書き始めた。暫くの間、四邊はシンとしてゐた。聞こえるものはたゞ、愈々瓦斯が充滿して來るための苦しさうな彼等の息の音と、無器用な手つきで、然も死に追つかれぬうちにと急ぐ、かすかな鉛筆の音のみであつた。

皆がまだ書き終らぬ中に、一人の男はバタリと背後に引くり返つて、苦しさうに手足をバタ〳〵ともがいた。他の連中はその男を慰めやうとも援けやうともしなかつた。なまじつかの事をすれば、餘計苦しみを長びかせる許りだといふことを、皆は知り切つてゐたのである。彼がもがく力もなくなつて、一しきり唸ると共に、舌を出して、恐ろしく歪んだ顏をし、ヂッと眼をあいたまゝ動かなくなつたのを見ると、皆はホッとした。皆が今これからぶつからうとする斷末魔の苦しみ、死の峠を、彼はもう通り越した幸福者である!

少年はガタ〳〵顫へて居つた。胸は締めつけられるやうで、一息毎に息は苦しくなつた。彼は父親の方に向つて何か云はうとしたが、舌は硬ばり、咽喉がカラ〳〵に干いてひきつるやうで聲が出なかつた。『阿父さん』と辛じてしぼり出した聲は、おし潰されたように、それでも微かに聞こえた。『阿母さんに、あの……私が』、『阿母さんに何ていふんだ、えッ?』と彼は抱きしめて口に耳をよせた父親自身も、締められるやうな胸苦しさに、目がグラ〳〵とした、息子の唇は微かに、ひきつるやうに動いたが、聲は咽喉の奥に搦まつたなり、途中で消えてしまつた。父親はガンと一つ頭を叩かれたような氣がすると、火のやうな渦に捲き込まれて行くように思つたなり、譯が分らなくなつた。指は鉛筆を掴んだなりに硬ばつた。

二

外では變をきいて駈けつけた、腰の屈んだ婆さんや、乳呑兒を抱へた女房達が、泣くやら喚くやらして、右往左往する坑夫や役員を追ひかけ〳〵、中の樣子を聞かうとしてゐた。四邊にはいつものように、乞食のような服裝の五つ六つから十歳あまり位の子供が多勢群がつて、笑ふやら、追掛け合ふやら、轉がるやらして騷いでゐた。中に五六人で、手を組み合つて面白さうに歌ひ、はしやぐ聲がきこえる。

『男爵さまのお邸の、
煖爐で燃すのは石炭か、

血のよに燃えるは石炭か、
おいらの堀つた石炭か、

いや違ふ、
あれは大事な、
人間の生命だ、
おいらの生命だ、
子供の生命だ、
仲間の生命だ、

あゝ燃える、
血のよに燃える、
男爵さまの客間の煖爐で、
おいらの生命が、
子供の生命が、
仲間の生命が、
眞赤に燃える、
血のよに燃える。

燃えたあとには滓ばかり、
おいらの生命も滓ばかり、
石炭がらだ、燃え滓だ、
おいらの一生は。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あゝ燃える、
血のよに燃える、
男爵さまのお居間の煖爐で、
おいらの生命が、
あゝ燃える、
眞赤に燃える、
血のよに燃える。

三

同じ時刻に、大都會の郊外の宏荘な別荘に、若い愛妾を相手に贅澤な食事をすませた鑛山主〇男爵は、今朝の一番で現場視察に行つて即日歸京した會社の重役、前大學教授I博士と應接間で向ひ合つてゐた。

『何だつてそんな危險な所を今まで放つておいたんだ？』

豚を國王の玉座に坐らせたような感じのする、緞子張の安樂椅子にフンゾリ返つた男爵は、豚のように無愛想な不興聲を出した。狡猾で卑屈らしい、猫のような感じのする博士は、恐縮しながら幾分不滿の色を見せた。

『然し閣下、其點は前にもお耳に入れました筈でございますが。何分安全な設備を致しますには、工費が五萬圓から掛りますし、一時休業となりますと莫大の損害を受けなければなりませんので。前にお耳に入れました折にも左樣いふ次第で、どうも御賛成を願へませんでしたので。つい今日まで、その、はい……。』

『然し君、あれを打捨てておけば七十萬圓からの損害になるとは僕は聞かなかつたぜ、坑夫の三人や五人、ヒヨツとするとやられるかも知れぬといふ話はあつたやうだが。』

『所が三人や五人では無いのでございまして。三十五人だけは大分重傷ではございますが、手當次第で助かるかと存じますが。あと二十七八人といふものは、全然救助の方法がありませんので、それも一人宛て五千圓づゝもかける氣なら又仕様もあつたのでございますが。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『もう好い、君も子供のやうな。』と男爵はぢれつたさうに、血のやうに燃える煖爐の石炭の中へ吸ひさしの煙草を叩き込みながら云つた、

『僕が云つてるのは金のことだよ、今度の損害の事だよ、坑夫なんか君、いつだつて何處からだつて引ぱつて來られるぢやないか、よしんば五人や七人多く死んだにしてからが、一人當り五十圓の葬式料だけの話だからナア。だから僕も會社のため、社會のため、國家のために仕事を續けることを主張したんだが。かういふ事と知つてりやァ、』といひかけた處、盛裝した女の姿がチラと扉口をかすめたのを、男爵は目敏く見つけた、

『とにかく復舊工事を急ぐんだね。いづれ又明日事務所で逢はうが。』

かう云ひ捨てゝ玄關へ急いだ男爵のあとを追うて、博士が玄關へ出た時には、襟留にも、兩の指にも、數千圓の寶石を輝かせた、あでやかな女が、男爵と共に劇場へ出かけやうとしてゐる處だつた。その後姿に向つて、博士が恭々しく最敬禮をしてゐる間に、自動車は徐かに町の方へ消えた。(飜案)

炎の海

福田正夫

炎の海より、
湧き立つ熱き潮。
擾亂の都會の
呻吟の聲がきこえる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

熱苦の人々よ、
ああ、虐げられる生活よ。

胸に唯涼風の海を、
うかべても炎が見える。

涙の如き汗を浮べて、
都會は炎の海となる。

深淵

深淵の中から
私は大空を見出でる。

暗い暗い星の夜の、
高く明るい月と、
輝くいちめんの輝き。

大空よ、
私の胸も暗い、
しかし異常の高さに、
生きやうともがいて、
生の一點へ、

私の心は憧憬(あこが)れる。

低風の街から

空は深く黒く、
あらしの脚は早く、
都會の上を蔽ふ。

低風が暑く來た、
眠つてゐる者すら、
いらだゝしく眼を見はつて、
い、い、
あらしの中に、
同化しさうになる。

雨か、風か、
それらの險しい風光が、
しづかにしづかに、
低風の街をつゝんでゐる。

種蒔き車（民謠）

種蒔き車を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

引き出して、
黒種、赤種、ふり散らせ。

胸の中から
泌み出した、
悩みは苦の種、生の種、
辛い、この生の
血のしづく。

生えろ、血の種、赤い種、
燃えろ、苦の種、黒い種。

街には暑い日が燃える、
胸には眞赤な血がうめく。

罷業の朝

山上正義

罷業の朝をなづくわが子なればしみ〴〵と抱く
罷業あけての朝暾つめたく植字盤の埃
解散されこの廣場は夕の雪さなりけり
鐵窓の君に書けば月のひた冴ゆるよ
夜業雨に更くるを爐火凝視めて默す親子なり

勞働運動と智識階級

村松正俊

勞働運動の最後の目的は、いふまでもなく勞働階級或は無產階級が社會的及び政治的にその支配權をにぎり、以つて無產階級の獨裁政治を現出するのにある。この目的は、たとひいかなる反對を受けやうとも必らず達せらるべきであり、さうしてまた事實さうならないではやまないであらう。それはいはゆるデモクラシーに反するかも知れない。しかしながらデモクラシーとは今日の支配階級が、それによつて自己を欺き、また勞働階級を欺く一手段に過ぎない。歷史的に考察するとき、權力の掘得があらゆる社會運動の最後の目的であることは幾多の例が教へてゐることである。何となれば政治的及び社會的支配權力を自ら有せずして、その階級運動の目的は決して實現されないからである。フランス革命が正しくブルジョワジがなしたところであり、さうしてそれの最後の結果として權力を當時の支配階級たる貴族及び僧侶から奪つて之をブルジョワジの手中に收めることに歸着したとすれば、現代勞働運動の結局も、單なる勞働時間問題や、賃金値上げ運動に止まり得ないことも明かであらう。否、階級的に目覺めたる勞働者にとつては、時間や賃金問題を論ずるよりもさきに、それを定めるところの社會組織そのものについて一疑問を發しなければならない筈である。それすらなさざる勞働者はつひに勞働運動の如何を解する能はざるものである。然らば現代勞働運動の目的がそこにおちつくのはもとより言をまたざるところである。しかしもしもその理由が單にかゝる歷史的のそれのみであつて、他に根本的なものがないときには、いつでも自分の非を棚に上げて、無產階級の壓迫のみを之れ事としてゐるブルジョワジは、それを他の根據から否認して、あらゆる獨裁が認められざるが故に、無產階級のそれも是認することが出來ないといふかも知れない。かゝる批難は、たゞ立場の相違のみで、同一の側面に立てば、同一のことより外にいへない筈である。それは何等意に介する必要がない。今日までアリストクラシやブルジョワジが勝手にプロレタリアの上に專制を行つてゐながら、形勢がかくの如くなるに及んで、今更かゝることをいへた義理でない。しかもその點を除いて、正當に彼等の言分を聞くにしても、なほ無產階級の獨裁政治が承認されなければならない理由がある。それは一言にしていへば生活の發展の當然の經路であるとい

ふことが出來る。それは後に多少論述されるであらうが、更に具體的にいへば、それは政治の本質として必然に來るものである。政治が生活にとつて全然必要がないこいふ無政府主義の理論は一應傾聴すべき價値がある。しかもその理論さへ我等に從へば一たびは無産階級の獨裁政治を通過しなければ實現されないのである。現代の政治はもとよりブルジョワジの專制の下にある。無政府主義者にして、もしも未だ來らざる無産階級の獨裁政治を否認するならば、今現存するブルジョワジの獨裁政治に對して何故拱手傍觀してゐるのであるか。それが彼らの第一の弱點なのである。否らずしてもしも現在及び近き將來に於て、なほ政治が生活の一樣式であり、一側面であることを認めるならば、それは當然ある種の獨裁を認めるものである。何となれば古來政治がはじまつて以來、それの本質としての專制は決して廢止されたことがなかつたからである。人は議會制度によつて專制が廢止されたといふ。しかしながらそれはたゞ君主獨裁が廢止されたのみで、その代りとして議會を通じてのブルジョワジの獨裁政治が建立されたのである。これはたゞ一例に過ぎない。しかもこの一例がまことに政治の本質の專制なることを示して餘りがある。然らば今無産階級が、現に受けてゐる支配に堪えず、自ら支配を獲得しやうこ企てるのは當然のことではないであらうか

何故に無産階級は現狀に滿足しないで革命を要求するのであるか。もしも彼らにその衣食住を支へる充分なる賃金を與へ、その勞働を快樂化するべく時間を短縮したならば、彼等はそれで滿足するであらうか。否。それは近代の傾向を知らざるものゝみは滿足するであらう。しかもいやしくも個人こしての自覺を得たものは決してそれをいさぎよしとしない。人は自らの主である。立憲制度を要求する人民は甞つていつた。他人の手により與へられる善政よりも、自らの手による惡政を愛すると。まことに自已の目覺めを有することは現代の特徴である。人もしも自我意識なき動物であつたならば、好遇は以つて彼を引止め得るであらう。しかも人は昔日の人でない。それは一個の自我を有する個人である。しかもブルジョワジはあくまで支配を握り、プロレタリアの上に台臨する。これすでに堪え得るところでない。然らば賃金や時間は問題でないのである。彼らの要求は明白である。これをしも否認しやうこするものは、いたづらに過去の罪のために、その眼が蓋はれたものか、或は自ら知らざるまねする狡奴である。

かゝる目的を有する社會運動は、當然勞働階級それ自身の力によつて完成されるべきであつて、決して他の階級の力を待つものでない。その故に温情主義が破壞せらるべきであり、その故に協調主義が打壞せらるべきである。勞働階級彼自身の力によつて、自已自身によつてこの目的を貫徹することは必然的に現社會に於ける支配階級この鬪爭を意味する。甲

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か勝つか、乙が敗れるかである。二つの間に妥協の道はない。社會運動は必らず現代の社會に不滿なるものが、現代の社會の支配階級に對して起すのである。支配階級はその支配を以つて滿足してゐる。滿足せるものと妥協することは一つの詐欺である。滿足せるものが差し出す手は誘ひの手である。不滿なるものが自らの力によつて、その目的の實現に向ふことは言をまたないほど明かである。

現代の支配階級たるブルジョワジはフランス革命によつて天下を得た。ブルジョワジがよつて以つて基礎とするところは資本主義であり、資本主義はその源を遠くかの科學の發達の上においてゐる。科學はいふまでもなく自我の目覺めから起つてゐる。宗教は嘗て生活の指導動機であつた。今や宗教は科學のために倒された。ルネサンス時代に於ける科學の芽生えがいかに當時の宗教と爭つたかを見るものは、科學が現代に寄與する効のいかに大きいかに感謝しなければならないであらう。科學は人間の理智生活の表現である。理智は人間を幸福にしやうとした。然り、それは人間の生活のために働くものであるが故に、それが人間を幸福にするのは、もとより當然の職務でなければならない。さうしてまた事實、過去に於て、生活のある側面に於ては、正しく人間を幸福にせしめる用に立つてゐたのである。しかしながら、この功の半面には他の害があつた。それは科學の直接の應用としての資本主義であつた。

資本主義そのものが、人間生活の發達の一段階として、決して害惡そのものでなかつたことは事實である。大工業と大商業と、之に伴ふに交通の發達は科學の應用として、生活のために働いてゐた。しかも資本主義が生活に必要なる時期をすぎてなほ存在することによつて、却つてそれが生活に害をなすのである。あらゆる制度がその時代の要求から起りその時代の要求を滿足させることによつて、その用を終へることは、必然の運命であると共に、制度そのものが生活に與へる一功勞である。かゝる制度が、生活の必要が去つてのちになほ嚴めしく盤据することが、あらゆる害惡の源である。政治に於てさうである。宗教に於てさうである。社會生活に關係するあらゆる制度は悉くさうでなければならない。生活は常に自ら創造しつゝ進みゆく一個の全である。全はそれ自身の組織を徐々に、しかもこと〲く變化しつゝある。その個をなすものは一瞬間といへども止まることはない。そこにもしも止るものが生ずるとき、その個と全とが相矛盾し、衝突し、干格を來すのである。制度はつひに人爲のものである。それは決して動かない。また進化しない。故に嚴密にいふならば、制度は各瞬間ごとにつくられて、各瞬間ごとに棄てられるべきである。しかもそのことは事實に於て、あまりに生活にとつて煩らはしいがために行はれない。然らば制度と生活とがいつか衝突することは自明の理である。この衝突を避けるた

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めに、制度はしば〳〵改定せられ、修正せられ、放棄せられる　その數の多ければ多いほど生活の役に立つのである。さうでないとき制度の固定が、進化せる生活の上に重味を以つて壓して來るのである。

資本主義もその通りである。資本主義も人間の生活の一部であるところの經濟生活の一形式として、それの發生のときは、生活の發展から直接に、その必要の下に生じた。さうして、さきにもいつたごとく、近代生活の特徴なる科學にその基を置いてゐる。科學は中世紀の宗敎的沒我に對する自我の目覺めから生じた。しかるに科學そのものが自らの世界をひらくと共に、そこに殆どアプリオリ的な科學の世界を建設して、個々の人格をそこに投入するが如く、資本主義も制度として固定すると、それが生活の僕とならずして、生活の上に位した。生活のための制度が却つて制度のための生活となつた。こゝに不思議なのは、科學を興した自我が平然としてその制度のうちに沒し去つたことである。故に銳き批評家は之を目して神化といふ。然り、それは制度の神化である。さうして資本制度の下に於て、人は再びその自我を失つて奴隷となつた。それはひとり勞働者のみに止まらない。資本家彼自身も、自ら知らざるうちに、制度の奴隷となつてゐるのである。然らば人は奴隷から脫しやうとするのも當然ではないか、人が主である。生活が第一である。資本制度に叛逆するのは、一個の人間としての任務であり、また意志ある人間の義務ではないか。

思ふに生活とは人間の生活である。生活の發展は人間全體に關係する、生活はそれの進化のために適當なる機關をもつてゐる。それのあらはれがいはゆる分業組織として、人間全體を各組織に分つてゐるのである。人體を構成する細胞が各ちがつた職分をもつてゐて、その職分を行ふことによつて、全體としての人間が成立することの比較によつて、生活を之に比し各個人を各細胞とみなす人があることの見方は全然正しいとはいへない。しかもある暗示を與へることは事實である。蟻と蜂とは社會生活を營む動物の例である。しかも蟻や蜂の內部に於ける分業は、人間社會の內部に於ける分業と等しいか否かは疑はしい。もしも人間にして全然その個性を失ひ得るならば、働き蜂のごとく働き、女王の如く子を生むことを以てその任とするかもしれない、蜂や蟻にとつてはそれは、全然の本能から出てゐる。人間生活の社會もまた本能から出てゐることは事實であるが、人間に於ては本能から派生して、半ば本能に代つてゐる理智が却つて本能の上に來てゐる。そこに人間の社會生活と蟻の社會生活との差が見られる。理智とは元來本能の一部であつた。本能は生活保持に第一に必要なものであつて、いやしくも生物に本能がなければ、それの生活が保證されないわけである。理智は人間に於て、その大腦と神經の發達に應じて發生した。人間がその生活をいとなむに當つて、本能のみでどうしてもその生活の保持が出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

來なかつた爲めに、かく理智が發生したのである。故に理智の職分は本能と全く同じである。然らば蟻や蜂が本能から社會生活の各部分をうけもつてゐるのも、人間が理智によつて之を判斷してその部分をとるのも結局同じことである。しかしながら、あらゆる進化的事物はそれの發生の動機を忘れて、それ自身が組み上げた一個の道をたどるやうになつてゐる。さきに擧げた制度でもその通りであつて、制度それ自身は元來生活のためにつくられたのにも係らず、それが生活の一機關としての仕事を果してゐるうちに、それ自身が主となつて、生活がその制度のために存すると考へるやうになる。現代に於て資本主義の害になつてゐる根本の理由もそこにあるのである。それが一例に過ぎない。しかもすべての存在はかゝる傾向をとつてゐる。その故に理智が元來人間の生活のために發生し、然も本能の足らざるところを補ふ用にしか立つてゐなかつたのである。然るに理智としての一存在をつくつた上は、それが一個の獨立存在となり、生活以外に一つの世界を現出するやうになるのである。それが著しいときは、結局生活と衝突して、敗北するに終るのである。その世界が哲學者の考へてゐる哲學の世界とか、純粹に科學者の考へる科學の世界とか、數學の世界とかがその一例となる。かゝる存在の獨立は、こゝにそれが理智それ自身のごとき職分を有するものに於て強いことは、申すまでもない。從つて一たび生活の外にかゝる世界が生じたとすれば、それは生活のためを考へるよりも、それ自身の世界を考へることが多くなる。その世界も結局生活と全然はなれるときは、死滅せざるを得ないのであるが故に、なほ全體として生活に關係をたもつてゆくのである。この理由が人間に於ける理智が、蟻や蜂の本能とちがふところであつて、從つて同じ社會生活に於ても、蜂や蟻のそれと、人間のそれと多少意味が異つてゐるのである。

生活はそれ自身でかくも展開され、そのうちにその必要なる機關をもつのであるが、この生活の根本が何であるかといへば、結局やはり人間、個人々々の生活であるといふの外はない。全く個性なき細胞や蟻であつたならば、さういふ必要はない。しかし人間に於て異る。理智が生活の外に一世界をつくるが、その一世界もひとしく一個人のうちに形成されてゐる。各個人々々そのうちに理智の一世界をもつが故に、生活全體のうちにかゝる世界が存するのである。さうして生活の目的は生活それ自身が目的でなく、このうちの一個なる個人の幸福のためにつくられたものであるから、その點に於てなほのこと、個人は細胞や蟻とちがふのである。この意味から、生活全體も、個人の生活に對しての一制度であるに過ぎない。

各個人がその生活を幸福にすることが全生活の目的である。この目的あるがために、全體に於ける個であるところの個

人の意義が存する。ある學者は之を却つて反對に考へて、個人の生活、個人の幸福はこと〴〵く之を全體のために犧牲にすることを命ずる。彼らの言ひ草によれば、全體が目的であり、全體が價値であるのである。しかもこの議論は個性ある、自覺した個人の存在を無視するもので、少くともそれ自身目的である個人を手段にした傾のあるのは批難される點である。それは人間を蟻や蜂と同一視するのである。個人を道具にするのである。個人を奴隷にするのである。しかもその全體といふ觀念は實は空しいもので、何の具體的なものはない。そこで彼らは國家こいふ觀念をもつて來る。國家は少くも現實せるものである。しかもその國家の實質を檢査すると、それは資本制度の一變形に過ぎない。國家の名の下に資本が支配をもつのである。かくして彼らの言ひ草は現代資本制度を擁護し、自我に目覺めた個人をもとの如く奴隷の境に置かうとするのである。かくの如きは生活に對して全く無理解であるといふことを示すに止まる。

かゝる意味での生活は、一個の全體である。全體は全く個のために存するもので、個のために全體は犧牲になり得ることがあつても、全體のために個が身を失つてはならない。その故に生活に於ける分業は個を通じてのみなされる。そこに生活の諸機關が發生する。さうして生活の本體はいふまでもなく生產にあるが故に、勞働階級が生活の本體となつてゐる。即ちそれは本能が理智にうつり而して理智が科學を通じてそこに近代の生活を開いたが故に、社會生活の本據が經濟生活にうつつたのである。然らば勞働階級が支配階級となることもまた當然のことなのである。それは資本制度がその發生當時に於て正しかつたが如く、今日に於てはプロレタリアの獨裁が正しいのである。

理智の職能は本能と全く等しい。故にそれは生活のために發生し、生活のために役立つのである。その職能は即ち生活を指導するにある。指導とは生活をたゞ生活からその害を除き、その幸福を來さしめる方向に進めるといふ意味に止まる。事實、生活は全體として一個のものであり、全體として自ら展開するものなるが故に、たとひ理智がいかに所謂指導をしやうとしても決してその指導の通りに行くものでない。もし理智がかゝる指導をするといふならば、それは越權の沙汰であり、制度が生活の上にかぶさるのと同一の過失に陷るものである。理智はその役目として番兵の任務をとるのである。それは生活の方向をかへたり、命令を下したりするのでない。之を忘れるときある一派の理想主義者や、觀念論者や、文化主義者のごとき誤謬に陷るのである、理智は現實でない。生活が現實である。さうして生活のみが第一義であり、その他の派生物は第二義である。現實はそれ自身存在であるが、理智は空なるものに過ぎない。

理智のかゝる職能は、しかしながら理智それ自身がその世界をもつことによつて、あるちがつた一景相を呈して來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それは外でもない。生活の各組織、即ち分業の一部門にいはゆる智識階級なるものを現出せしめたことである。智識階級は、生活の一部門なる理智を主として取り扱ふことによつて、それの社會的存在の價値を明にするものである。その方法にはいろ〳〵ある。或は文字通りに理智のつくつた科學の世界に入つて、いはゆる學者、學究として、恰も、また主觀的には、生活と全然沒交渉のごとく生活して、たゞ學問に熱中するものもある、或は他人のために代辯して生きてゐるのもある、またその獲得した智識を勞働せしめて生きてゐるのもある。いづれにしても智識階級は、社會分業のまゝに從つて主として智識を取り扱ふことによつて、生活につくしてゐるのである。

人がいはゆる精神的と稱する方向、即ち科學、哲學、藝術のごとき側面は、その根本はやはり生活それ自身の必要から出て來たのである。生活それ自身はもとよりそれの原始的時代にありては、他の動物のそれと全くひとしく、種族保存のためにのみ存してゐるのであつて、自己保存といふといへども畢竟種族保存の一形態に外ならない。それはつまるところ性慾生活に歸着する。この見地からすれば、あらゆる生活はこと〴〵く性慾のために發生し、性慾のために存在する。そこに藝術といへども、哲學といへども、また科學といへども、みなそれの起原が性慾に求められる理由が存するのである。それらの細論は他日を期するとして、かゝる起原をもつてゐるものでも、人間の理智がひとしく性慾のために起つたものであるとはいへ、存在の獨立性がそこにも働き、また事物の目的充足の理がそこに見出されるのである。現代に於ける藝術なり、哲學なり、いはゆる精神的文化なるものは、かくして全くそれ自身性慾から獨立した働をなすやうになつた。この獨立したものがやはり現代に於て性慾から獨立した生活のためとして存在する。この生活の主體が變ずるに從つて、智識の任務もまたかはつて來る。然らばいはゆる智識階級の成立したのちに於て、その智識階級が、自己を成立せしめてゐるその基本階級のためにつくすのは當然であり、またそれが生活の當然の行き道なのである。貴族社會の詩人がたゞ貴族のためにのみその光榮を謳ひ、ブルジョワ社會の科學者がブルジョワジのためにのみその科學の應用にはかることもまた推せらるべきである。さうして現代資本制度の基礎はかたく科學と手を結んだ。

眞理なるものも元來相對的である、眞理はプラグマチストのいふ所に從はざるも、また生活のためにのみすることは必定である。人は絶對の眞理を求める。それは理智が生活から遊離したときに於てのみ、學者の頭腦中に發生するもので、それの根底は全くないのである、眞理はそれの時代に應じてゐる。昨日の眞理は今日の眞理でない。科學が之を明かに證明すると共に、道德はしば〳〵之を蓋ひかくしてゐる。たゞ根本は生活そのものにかゝる筈である、生活から遊離したる

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞理は眞理でない。眞理はひとしく智識階級の產出物である。それが生活の動機となるものである。ブルジョワジに於けるあらゆる眞理は悉くプロレタリアの眞理でない。智識階級はその本來、生活のために智的創造をなし、直接にはその支配階級のために働いてゐる。姑らく支配階級そのものからはなれて、生活そのものについていへば、眞理とは生活のためであるか否かによつて決せられる。即ちひとしく生活のうちに資本制度も無產階級獨裁もふくまれる點からいへば、眞理も生活そのものに對しては共通なるべきものが存する。資本主義の下に於ける眞理にしても、もしもそれが生活の發展そのものに對する眞理であれば、次の時代に於ても眞理である。相對的なる眞理は一階級中に於てのみ眞理である。もしも生活それ自身の本體がかはつたときには、眞理の內容のかはることが眞理である。

然らば現代に於ける眞理とは何であるか。生活そのものゝ發展は科學の力によつて資本制度を創造した。この制度の効果はすでに終つた。それが生活に與へたる功は見るべきである、しかもそれは過去である。過去の眞理は現代の闘するところでない。前述のごとく科學が資本制度の直接の基礎となつてゐるのであるが、その間に科學が生活のために無產階級を生み、而してその無產階級が生活のために革命運動をなすとすれば、その眞理の何たるかはすでに明かである。生活に於ける眞理は一である。然らばこゝに於て眞理は革命運動でなければならない。現代勞働運動を否認するものはブルジョワジの眞理である。その眞理は生活そのものから否定せられる。然らば殘れる眞理は革命運動肯定の眞理である。その眞理は何人が創造するのであるか。

人は知るであらう。智識階級は一の寄生物であるに過ぎない。しかしながらそれは單なる一寄生物でなくして、一階級に於ける一事業を分擔する一機關である、元來生活そのものゝ一機關であるが故に、生活がある階級のものとなつたときその階級に附屬するのである、現代智識階級は疑ひもなく、資本主義の下に育てられ、そのために働いてゐる。それが現代資本制度の擁護につとめることはいふをまたない。たゞ生活そのものに即する眞理を保持するものゝみが之を否定して、新らしき生活の形態を認容する。さうして殘れるものは勞働階級それ自身から發生し、その手中にある智識階級がそれ自身のために精神作業をなすのである。勞働運動も生活の創造である。この生活は人間生活全體の一系統である。それは智識を排斥することは出來ない。生活の發展が智識を要求するからである。ある種の勞働哲學が智識を全部否定するのは一の偏見である。それはブルジョワジの智識のみを否定すべきである。純勞働階級そのものは生活の本體であり、それが支配階級となるべきときは事實である、しかもそれに智識なきときは、それの指導動機を缺くことになるのである。いかなる時

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

代といへども生活はその指導動機を要する、それが智識及本能である、さうして現代は理智の發達にかゝつてゐる。然らば勞働階級も智識そのものを欠くことは出來ない。坊主を憎むは可である。けさを憎むに及んで無用の事をなすに至るのである、勞働階級はその陣營のうちに智識を扱ふ一機關を要すべきである、現代はひとしく二大陣營の對立せる時代である。さうしてその各がそれ自身のうちにそれ自身の發展のために必要なる機關を有すべきである。之を缺くとき一方の敗れることは明瞭である。もしも勞働階級にしてはじめから理智を度外視するときは、勞働階級が生活の本體なることも忘れるものである。さうして近來わが國の勞働運動に於ていはゆる智識階級の排斥の聞えることについて、もしもそれがブルジョワジの智識階級を排するといふのならば議論はない。しかしもしもそれ自身に於ける智識階級をさへも排せんとする意味であつたならば、それはあまりに淺見である。事實に於てわが國の智識階級は現在は悉くブルジョワジの產物である。それがブルジョワジの產物であるか否かは、それの出身によつて決すべきでなく、それの質によつて見るべきである。現代社會組織はブルジョワジのためにつくられてゐる。さうしてわが國に於てはなほ舊貴族意識が拔扈してゐるが故に、その景相は更に複雜である。故にそのうちに於ける智識階級は悉くブルジョワジとアリストクラシーの混合の生產物である。しかしながら資本主義が必然に勞働運動を生み出したごとく、この複雜なる事實から生ずる智識階級に於て、なほ現代の眞理を認めんとするものゝ皆無なることは保證が出來ない。存在は自らを破るに至るのである。ブルジョワジのみの世界に於ては、それの根低は堅い。しかし複雜なる社會の組織は却つてもろいのである。智識は眞理を生む。それは生活そのものに屬するものがあると共に、その屬する階級に資するものがある。純ブルジョワジのうちに於てさへ、前者は眞に眞理のすがたを認めるのに躊躇しないであらう、生活にかへること、それが眞理を認識する唯一の手段である。時代の一景相のみに囚はれることは自らの立場を失ふことである。勞働階級は生活の本體なることを意識して、進んで自巳の生活體系の完成をはかるべきである、そこに勞働運動と智識階級との連鎖點がある。

わが國の現代智識階級はいはゆる官僚主義の下に養はれた。それの大多數が勞働階級に反してゐるのは事實である。それはわが國の社會組織全體が生活そのものに即してゐない、いゝ例である。たとへば官學萬能主義となつたり、帝大主義となつたりすることゝ、また私學が相率ゐて官學化しやうとすることゝ相應じてその證を示してゐる。かゝる智識階級はもとより勞働階級の排してやまざるところである。しかしながら智識階級が生活そのものゝ一機關であることを自覺し、さうして生活そのものゝために眞理を創造するならば、決してかゝる誤謬に陷るわけはないのである。資本主義の弊を指

摘し、革命運動の眞理なることを認めるのに吝かでない筈である。かゝる徒はたとひブルジョワジとアリストクラシとビユロクラシの間にあつてなほ生活のための眞理を高唱するであらう。また高唱すべきである。然らざる限り現代智識階級は生活の機關なることを忘れ、いたづらに生活の發展の一段階に過ぎざるその階級のまことの寄生虫としてその命を終へるであらう。これは運命である。智識階級は小なる眞理を否認すると共に生活の眞理を認識すべきである。これ彼らの眞の任務である。然らばその現代に於てなすことの何であるかは自ら明らかとなるであらう。

爛れた眼

白鳥省吾

おゝ地の癌たる
炭坑の上、
秋の日の空は
あまりに青く
あまりに快き魔睡のいろ。
丘に立つ巨大なる數本の煙突の黒煙も
たゞ鮮やかに
照る空を流れ
平地を尋ね這ふ炭坑町は
徒らに瘡蓋のごとく錆びて
もの靜かな晝。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

坑内を出て來たばかりの十六七の少女が
低くむさぐるしき長屋の前に立つてゐる、
無心であるか深き疲れか
濕つぽい黒木綿の坑内着を短く着て
石炭の粉に汚(よ)ごれた四肢と顏も露(あら)はに
その眼の縁(ふち)は赤く爛れてゐる。

おゝ美しく淸らかであるべき少女の眼も
その魂もその肉體の各部分も
ひどく傷(いた)められてゐることが判(わか)る
(坑内で働く人は眼を惡くするといふその地下なる數千の男女の一人よ)
おゝ不運に選ばれた此等の人々に
世の誰が共同の責任を感ずるであらう。

人生は流れゆく
爛れたる少女の眼にその姿に
秋の日はあまりに明るく痛ましい、
おゝ事實こそ限りなき哀訴であるが
炭坑町そのものすら
いかにも他所々々(よそよそ)しげに靜かである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

刃に刺されて

松本淳三

たえがたい　痛み
おゝ…………
心がまける　心が弱る

(……やられたなあ！)

渇いた口に
のみこむ唾
そつと開いた
——眼にかすむ夜空の星

(あゝ……やられたなあ)

…………

かすかに〱兇徒の歎聲

血を越えてゆく

われら　血を越えてゆく
はらからが流したる
くろき血をぞ　越えて尙ゆく

おそろしき權力は
ゆくてをふさぎ
するどき刄は
たえず頭上にひらめけども

あらしの如く
泉のごとく
石をおしわけ　春　芽をふく草の
力に似て
彼岸を遠く
たのみ且つ信じ
あゝ　われら血を越え
たゆまずゆく
はらからに續き　また
はらからを後に率ゐて——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月を仰いて

落ちてくれ
遠い 地平の
冬の月よ！
私はお前の微笑が嫌ひだ
皮肉さうな光が嫌ひだ
そして如何にも悲哀を含んだ
そのわざとらしい吐息がきらひだ

お前の光で
あのがらんとした寄宿舍の窓に
ついだまされる工女は夜通し
遠い母親のことを思ひ出し
お前の吐息で
あの人のいゝ老ぼれた立ん坊は
公園のかたいベンチに
しみじみ寒さと 切ない空腹を背に感じる！

――が
お前は暖かな倶樂部の二階で
カルタをいぢり 酒を呑んでる

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

華族の若い道樂息子の
きしやな手先に
　（しぼつたカーテンの窓を透して）
また、小鳥のやうな女優と一緒に
やはらかい自動車の坐席にうづもれ
今！　あかるい街路を馳走してゆく
男のつやゝかな横顔に
たえず微笑を惜しまないのに
あゝ——　明日を待つ
死刑囚の涙と祈り……ざんげの小窓に
お前はつめたい微笑（ゑみ）をもたらす！

思へ！
（こゝに二つの——得意と絶望
　また幸福と不仕合せ
　それらが同時に　地上にあつて當然だらうか？
　それが神の意志（こゝろ）であらうか？……）
遠い地平の
冬の月よ！
皮肉な微笑、つめたい吐息の
あの石灰のかたまりよ！
おちてくれ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一刻も早くおちてくれ
私はお前を見るのも嫌ひだ
否！私はお前を呪つて居るのだ！

三人の乞食

沼田流人

一

彼は、若し可能(できる)なら、死ぬまで自分の墓穴の側に默つて坐つてゐたかも知れない人間なのです。彼は、唯食ふだけを貰ふ爲めに街を彷徨てゐたので、事實(まつたく)この地上には、何のしごとをもゝつてゐないのでした。彼は、既う六十ばかりで、その頭を倦げに胸の上に屈めて、謂はゞ化石したやうな顔をしてゐました。ひどく老慴れたやうに歪んだ軀に、曳ずるやうな暗褐色の襤褸外套を着て、その薄禿の頭には、大山大將の銅像が被つてゐるやうな奇妙な型の帽子を乘けてゐました。彼は、頭を胸の上に垂れて、兩手をポケットに突込んで、何かの用事で、然うしてゞもゐるやうにし街を歩いてゐました

彼は、殆んご終日を、△△の材木置場の空地で過しました。何か、頭を日に乾かしてゞも居るやうに、そこの塀の杭に頭をのせて、默つてゐるのです。密ご口の中で、譯の解らない唄を呟いてゐることもありました。でなければ、隅の所に吸着いたやうに蹲まつて、眠つてゐるのでした。

彼は、或辻で遭遇た男に、何處かの家を尋ねました。そして、その男の指さす方へ狹い小路をさも用事有げに急足に歩いて行つて、さつささ、その家の前を通り過してしまひました。

『おゝい。君、君。…………其處だよ。おゝい。…………』

すると、彼は一度倦げに立止つて、四圍を見まわしてから聽て、歩み去つてしまつたのでした。

『なあんだ。あの男は………。』

その人は、自分の顔の前で一つ指を彈いて呟いて立去つたのでした。無論、その小路は、彼の住んでゐる材木置揚への、通路だつたのです。

或時はまた、〇〇街の角の空家の、破れた扉の硝子に自分の顔を映して佇立つてゐました。そして、泣きさうな、顰面をして冷笑(うすわら)ひながら、顔を擦よせて何かぶつ〳〵こ話しかけて、呟いてゐたのでした。

私は何時か、路上で彼と遭遇たことがあります。彼は、急足に何所からか現(やつ)て來て、さも何か要事でもあるやうに、恭々しく頭を下げたのです。で、私も立止つて頭を下げて微笑するこ、彼は、しげ〳〵と私の顔を覗き込んで、自分も微笑して、も一度禮をして、そこへ通りかゝつた荷馬車に隨て何處かへまた行つてしまつたのでした。

私は、此の外に、彼に就て如何な事を誌すべきでせう。彼には、此以外の異つた事を、恐らく爲たらうこは思はれません。つまり、彼のしごとは、皆如斯な事ばかりだつたのです。そして、彼は遂に、その△△の空地で死んでしまつたのです。

彼は、死ぬ些し前の或夜、一度私等の木賃宿に、現はれました。そしてずつこ隅々に物も食べないで寢てゐて、夜の間に、こつそりと行つてしまつたのでした。

■

彼の云ふ所に據れば、彼は『乞食ではない、藥賣り』なのです。それは、ホップ草の實とシコロの樹皮この粉を混ぜた丸藥でした。それが如何な病に効くのか、彼自身にも解らないのでした。その名もない藥品は、すばらしく賣れました。それは、只だつたものですから。つまり、彼の掌に、食物の一片でも、銅貨の一枚でも載せた人の總てに、それは置かれたのです。私には、何の爲めに彼がそんな事をするのか不可解でしたが、間もなくそれは立證されました。彼の、同業の人たちが、悉皆浮浪罪で拘引された時、彼だけはその巡査に哀げにを頭振りながら、泣聲で辯疏したのです。

『俺は、損ばかりして、重い荷を背負て遠い旅をしてゐる、行商でがす。何も、そんな………。』

『ふん。』

巡査は、この男を一々秤に懸けるやうに、注視してから、鼻で笑つて彼だけを、取遺して行つたのでした。彼は、巡査に合掌して、哀れつほい聲で何か呟きながら、むやみに忙しくその狡さうな瞼を瞬いたのでした。

彼の藥箱は《彼は、自分の荷を、然う呼んでゐました。それこそ、眞の藥箱です。それは、此哀れな行商の、生命を繼

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いでゐたのですから。)事實に、重いのでした。軀幹の低い跛の彼は、その紐を首に懸けて、佝僂のやうに蹰まつて歩いて、ゐました。彼は、腰きりの黄色ぽい襤褸を纏つて、そのだぶ〳〵した、補綴だらけの股引は、破目から彼の膝を露出してゐました。首をひごく屈めて、頭髪の茫々した片眼の頭を傾けて、顋を突出して、何か首に縄を着けて曳ずられてゞもゐるやうにして、歩くのでした。

彼は、最初私等の宿に來た時、その樂箱を首に懸けたまゝ、冷たい板間に膝を折つて、兩手を突て喋り始めたのでした。

『……渡世もちまして、親分さんこ申上げます。(背中に負ひましたる、菰包、首に吊げましたる頭佗袋の儀は、御免なすつて、おくんなさんし。……手前儀は、淺草觀音堂椽の下に住居仕る、鍋盞取太之助の、身内で御座んす。親分樣縄張内通行の節は、立寄りまする家々軒下、通り縋りの橋の下、辻堂椽の下の儀は、御免なすつて、おくんなさんし。………』

彼は、その黄色つぽい汚ない顔を揉みくちやにして、咳入りながら、恐ろしい早口でこんなことを喋り續けました。破れた笛のやうな、痛々しい響を立てゝ、息を吸ひ込みながら。事實彼は、ひごく喘息に侵されて、その呼吸の一々さへ、悩ましげな、呻聲のやうに聞ゑるのでありました。

『お前さんは、偉いね。本職なんだ、ね。それで、俺が、その、つまり「親分」かい。』

宿主は、(私の祖父は)薄笑ひしながら、彼を凝視て言つたのでした。するこ彼は、祖父の顔を竊視て、微笑しながら言ふのです。

『今時の奴等は、誰も「禮式」を知りません。』

そして、ひどく取澄した顔をして、空虚な咳拂ひを一つしたのでした。

『違ひない。』

祖父は沈んだ顔をして、獨言のやうに、愁はしげな聲で呟いたのでした。

彼は、私の古股引を一足盗んで、行つてしまひました。それが、何の『禮式』であつたのか私にはわかりません。つまり『今時の奴等は、禮式を知らない』のです。

祖父はその時、薄笑ひしながら、呟きました。

『股引の儀は、御免なすつておくんなさんし。……』

二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は、既う六十位の軀幹の低い老人で、その顔は日に燒けて、汚れ饐れてゐました。彼は、手拭地の汚ない浴衣を着て、繩を吊したやうなぼろ〳〵な袴をはいてゐたのです。

その姿で、彼は人々の家の土間の片隅に首を差延べて、踞まつてゐるのです。そして、投與へられた食物を、さうしたまま食べ終ると、薄笑ひしながら、足の埃を拂つて立去るのでした。その仕草には皆腹を立てました。何時か、腹を立てた石鹼屋の細君に、彼は灰を浴せかけられた事があつた位です。

然う。私は、その事を彼の爲めに書きませう。彼は、その時幾何かの金を握つて、その居酒屋に入つて行たのです。(それは、△△街の外れの汚ない居酒屋でした。)そして、ともかく自分の全所有(ありたけ)を、飮だのです。つまり、コップに八分目ばかりの、燒酎を……彼には然し、そのまゝ汚れた卓の側を、立去る事が能ないのでした。彼の靈は、足の裏へ(その汚れた酒の臭ひの泥濘に)ずり落ちてしまつて、意氣地ない自分を曳ずつて行く力もなくなつてゐたのでした。で、彼は、確かに埃が立つ程綺麗に甜てしまつたコップに、唇をつけて哀しげな眼でそこらに立つてゐる人を見まわしてゐたのです。然し、皆彼に似たぼろ〳〵な連中ばかりで、誰もそのコップを彼に差出す者がないのでした。

その時、ずつと隅の薄暗い所で、阿片の瓶を(それは、彼等の稱でゐる、いたんだ酸ぱい酒の滓の事なのです。それは一瓶十八錢だつたのです。)抱て飮(やつ)てゐた軀幹の高い黄色い尖つた面の男が、彼を見て顔を蹙めて、鼻で冷笑つたのでした。

『ふん……』

すると、彼は、兩手をだらりと垂れて、俯れたまゝ、その男の前に進み出で立つたものです。

『へん、犬奴! 飮みたけあ、吠ぇあがれ。』

その男は、毒々しい嘲笑に顔を歪めながら喚き立てました。

『わう、わう、……』

彼は、その言葉の下から首を振りながら、哀げな唸るやうな聲で、吠えました。その男は、ぴくりと怖え上つたが、やがてじろ〳〵と彼を見つめてから、蔑んだやうに舌甜ずりをして汚ない一本の箸を振つて、彼に命令し始めたのです。

『四這にならねえか。』

彼は、四這にならうとして、醜態(ぶざま)に潰れ込んで、頭を振りました。

『まわれ、〳〵。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は、遂にその男の箸の先に曳ずられて、のろくさと汚ない土間を自分の體を曳ずつて、廻り始めたのです。

『尾を振れ。尾を振れ。』

彼は、（然しどの尾を振れるものでせう。）苦い顔をして、兩手を擡げて、後足の膝で立上る藝をしたのでした。

『尾を振れ。』

その男は、彼の頭の上で箸を振りまわして、凄い聲で歯を露出して唸りました。然し……彼は、遂に首を差延て、泣きさうな顔をして頭を振りました。その薄禿の尖つた、一握の灰色の毛の粘着いてゐる頭を……。彼を取巻た人共は、大聲で罵つたり、嘲笑つたりしました。誰かは、彼の頭に履物を投つけて、叫びました。

『此、汚ない尻尾を……へ。』

髪の長い、若い藥賣は、彼の頭の上で二つばかり指を彈いて、唾を吐きかけたのでした。

『お預け。』

すると、彼は、前脚で土をかきながら、泣きさうな顔をして、くん〳〵と、鼻を鳴したものです。その男は、その瓶を自分の頭の上に、高く差上げて怒鳴つた。が、急に、それを彼の前の土間に置て、愁はしげな聲で言ひました。

『お前さんは、早く、死ねばいゝのに……。』

そして、兩手で顔を掩ふて、急足に歩み出ました。彼を取巻た連中も、何か顰面をしながら、そこを離れ去つたのでした。彼は、兩手でその酒瓶を摑んで、その土間に潰れ込んだまゝ醜く顔を歪めて、笑ひ出しました。

それは然し、コップに四分目位しか殘つてゐないのでした。彼は、その一口毎に舌を鳴しながら、それを些しづゝ啜りました。それから、瓶を口にあてゝ仰向いて、右の掌で、その底を叩いて飲終りました。彼は、當時寂しげな眼をしてゐたが、今度は水瓶の水を注いでひどく搖り始めました。彼の同胞等も、此行爲には全然愛憎を盡して、默り込んでしまひました。彼は、その滴まで甜めてしまうと、長い間瓶の口を眼に押當てゝ内部を覗いてゐたが、遂にそれを机上に立てゝ、起上つて一歩退いて、恭々しくその空瓶に禮をしました。それから、そこらの人の一人々々に――誰かゞその時、くす〳〵笑ひました。

然し彼は、その人々の沈默に送られて、戸外へ歩み出ました。そして、その破れた扉の所で立止つて、自分の額を爪で彈いて、嘲けるやうに冷笑したのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そして、ふらついてその破れた橋板から、狹い水のない泥溝の中に辷り落ちると、そこに潰れ込んでしまつて、這ひ出さうともしないで、嘲笑つてゐたが、遂にその土に頭を押あてゝ、自分に何か話かけ始めたのです。終ひには、頭を振つてしく／＼と泣きながら、そ まゝそこに眠つてしまつたのでした。彼は、何處へでも自分を、さうして塵埃のやうに拋棄て置て、片附けやうともしない人間なのでした。

彼は、その後此街で、行路病者の施療院に長い間、寢てゐて遂にそこで死んでしまつたのでした。それにしても、彼は何の病であつたものか………。

——一九二〇、一一、二四夜——

比叡の雪

宮島資夫

一

山の上には、雪の降らない日はなかつた。どうかした工合で、ちよつと小止みになつて空がカラリと晴れ渡つて湖の面に紺青色の空と、對岸の白い山の影を映して廣重の繪を想はせるやうな、おつとりとした美しい色になる事もあつたが、丹波の方から吹いて來る風だ、と武林無想庵の云つた風が、ごう／＼と吹き初めると、比良山の峯の方から、灰色の雲が速足で馳けて來る。そして一間先きも解らないほど、濛々とした吹雪で立ち籠めてしまふのだ。

いたづらな子供達も、その烈しい雪には恐れをなして、出て行かうともしないのだ。たゞ廣い母家の廣間——と云ふと體裁が好いが、そこには疊の床だけ敷いてある——で、わい／＼云つて騷いでゐる。私は私で、離れになつてゐる六疊の部屋に閉ぢ籠つて、毎日々々同じやうな事を考へ續けてゐるばかりだ。

吹雪が烈しくなつて來ると、空は眞黒に暗くなる。部屋の中はいつも黄昏のやうに薄暗い。僅か二枚だけ明くやうになつてゐる障子にも、絶えず雪はさら／＼とぶつけて來る。寒さが強くなつて來ると、母家の方から次男の克が、「オーオーオ」「オーオーオー」と悲しいリズムをつけたやうに泣く聲が聞えて來る。私はその聲を聞くと、身を責めら

れるやうな氣がするのだ。

二月四日の朝に東京を發つた時には、空はよく晴れてゐた。春のやうに暖かい日の續いたあとなので、大磯小田原邊の田舍道には、梅の花が散りかけてゐた。關ヶ原邊で滿月の登るのを見た時にも、それが寒天に輝く冬の月とは思へなかつた。それにはもつとも、汽車の中を暖めてゐるスティームの故もあつたらうが、晩春の朧月を見るやうな氣になつて、眺めてゐたのであつたけれど。その晩一晩大津で下りて、琵琶湖の湖畔の宿屋に泊つてゐた間に、世界の景色は全く變つてしまつたのだ。

その翌朝早くから眼を覺して、朝日に輝いてゐる湖水の面や、雪を頂いた比良や比叡の姿を豫想して、雨戸をがらりと開けて見る。比良も比叡も湖の面も、一間先きも判らないほど、濛々とした吹雪に閉ぢこめられてしまつてゐた。その時私に多くの金があつたら、雪の晴れ間を待つ間、朝酒でも飮みながら、そこの宿屋に止つてゐたかも知れなかつた。けれども、僅かな家財道具を賣り拂つて、やつと東京を立つて來た足りない旅費では、そんな事は夢にも及ばない事である。小さい者には可哀さうだと思つても、どうしても登れなかつたら麓の宿屋に泊るまでもと心に思つて、朝飯を濟ますと宿を出た。

汽船の發着所は、十間と隔たらない、すぐ眼の前にあるのだが、湖水から吹きつけて來る烈しい吹雪に、大人でも闇の中を歩くやうな氣のする位に思はれた。それでも身體の丈夫な六つになる長男の方は、

「やあ冷たいなあ」と怒鳴りながら、勢よく馳け出したが、まる三歳になつたばかりの次男の方はさあつと吹きつけて來た吹雪を受けると、

「オーオーオー、オーオーオー」と東京にゐた頃とは、全で違つた泣聲で泣くのであつた。「今にお船が來てのんのするこね、あつたになるから我慢なさいよ」とかゞみながらなだめてゐる。妻の眼にも涙が一杯たまつてゐた。

その汽船に乘つてからも、三井寺も唐崎の松も見えはしなかつた。船客と云つても私達親子がゐるばかりの淋しい船は、ちぎれ綿の中を行くやうな、白い世界をたど〳〵と走つて行く。坂本に着いてから、雪の中に下りた時、兒はまた、悲しい聲で泣き初めた。湖岸に降りつむ雪の中に、その聲が淋しく響いて行くのである。やつと探し出して來た一臺の人力に、二人の子供を乘せて、私達はそのあとから、とぼ〳〵とついて行くと、こんどは姿が見えなくなつたので、その中から「かあーちやん、とーちやん」と怒鳴りながら泣いてゐたが、少時してからぴつたりと默つたので、幌の間から覗い

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て見ると、小さな二人は抱き合つてぐつすりと眠つてゐた。

その日の午後に、雪の小止みとなつたのを幸ひに克は、足に負はせ、長男の伸を足袋はだしにして、雪の山道を歩かせながら、私達は登つて來た。その時やつと六歳になつた計りの長男が、マントを着てハダシになつて、自分の丈より高い竹の杖を突きながら、二三間先きの雪の坂を、よち〳〵と登つて行つた小さな姿が、今でも眼の前から去らないのだ。

それから後ち山に來てからと云ふものは、雪の烈しい寒い日だの、宿院や教主院へ風呂を貰ひに行く時に、凍つた雪道に足をすべらしても、克は必ず、

「オーオーオー、オーオーオー」と、悲しさうに泣くやうになつてしまつた。

正覺院の離れ家に、吹雪の廂に埋まつて一人して物を考へてゐる時に、その泣聲を聞くと私の心はいつでも尙更ら暗くなるのであつた。何も知らない子供達にまで、こんなに淋しい苦しい想ひをさせて、さて私は、どうしやうと云ふのだらう。何の爲めにあの賑かな都會を去つてこんな山の中に來たのだらうと、それはまるで他人事でもあるやうに、今更ら想ひ出して見るのであつた。

私の多くの友人は、世界に燃え上つた全人類の生命の恢復の爲めに、各人の物を各人に返せと勇敢に叫んで働いてゐる。それでない人達も、或ひは藝術の爲めに思想の爲めに、勇敢に闘つてゐる。私は夫れ等の運動を心から拒否するのであらうかと自分の心に尋ねる時、「否」。と私の心は答へるのだ。それなのに、何故に私は夫れ等の運動に端的に飛び込めないのか、殊に四五年前までは、たゞその事の爲めにこそ、自分の生命を喜んで捧げやうと信じてゐた運動に。

夫れには樣々な原因もあつたに違ひはない。けれども假令どんな理由があつたにせよ、自己の信じ、自已の奉ずる道であつたなら、自分一人になつた時でも、必ず勇敢に進み得べきわけである。時機を見て突進するとはポリティシャンのする事だ。道を信ずる者の行ふべきことではない。神を信ずる者にはたゞ信があれば好いのだ。成敗を論ずるのは、信者の爲すべき事ではない。

それなのに此頃の私は、時々に堪え難い寂寥に襲はれる。淋しさの餘りと云はうか、苦しまぎれか、生活の力を失つたのか、時々に唐突として死を欲するやうな氣になるのである。或る時私は船の上から、青黑い水の流れを見つめてゐて、引き入れられるやうに、ふら〳〵と立ち上つた事もあつた。又た或る時は、何と云ふ事もなく、刄で頸動脈を裁ち切つて、一氣に息の絕える快さを想像して樂んだ事もあつた。適量のモルヒネを口にして、昏々と眠るやうに死に就く事も、私の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

心を樂しくした。そして船の上に於けるやうな突嗟の場合には、云ひやうのない戰慄が私の生命を止めて呉れた。けれども憂欝な想像に耽つたあとでは、殊にそれが明方の眠りから覺めた時などには、私は自分の存在を疑ふほど、此の宇宙も人生も、バカ／＼しい無意義のものとしか思へなかつた。私に何よりもそれは一番恐ろしかつた。かうした生活をまだまだ續けてゐたならば、私の生命は生きながらに、枯れ切つてしまふより外に道はなくなつて了ふだらうから。

私がさう云ふ苦しさに堪え切れなくなつた時に、友人の辻が叡山から歸つて來て山の靜寂を聞かせて呉れた。さうして私は遮二無二この山に來たくなつて、家族をつれて來るやうになつたのであつたが、訪ふ人も、訪はれる人もないやうな吹雪の底の寂寞たる生活は、私の心を一入と寂しくさせた。生か死か、生か死か、とたゞ夫ればかりを思ひつめて暮してゐる。その時にあの兒が、

「オーオーオー、オーオーオー」と悲しげなリズムをつけて泣き出すと、私の心は躍り上るやうに痛むのだ。さうして又た、あゝ云ふ子供達が、何で私のやうな親のところに生れて來たのだらうと今更のやうに思ふのだ。

風が變ると山の雪は、思ひ出したやうにけろ／＼と晴れて行く。晴れるとすぐに眼の下に紺青色の湖が現はれて、對岸の連山は夕陽を受けて輝くのだ。そして老松の梢につもつた雪が、風に拂はれてばら／＼と散ると、銀粉を撒いたやうに輝いて飛ぶ。樫鳥は雪の積つた枝から枝へ、忙しさうに飛び初める。

宿院の廣い座敷にたゞ一人して、ぽつねんと暮してゐる辻は、晴れ間になると、雪だらけの足をしてぶら／＼と遊びに來る。そしていつも、

「よく降るねえ」と云つたゞけで、二人とも默つて寢轉んでゐるばかりだ。

夜になつてから、辻や私達の家族は、よく教主院へ風呂を貰ひに行つた。教主院は根本中堂の下の北谷にある。そこには觀明院と云ふ行ひ濟した坊さんと、中島君と云ふ青年がゐた。月のない暗い晩に辻と私達とは、風呂に暖まつて雪道を歸つて來た。その時辻は突然驚いたやうに、澄み切つた空を仰いで、

「おい見ろよ、こんな奇麗な空は、下界では見られないぞ」と提灯をぶら下げてゐた手を差上げて火影ですかすやうに云ひ出した。

私も空を仰いで見た。それは全く、黑水晶のやうに透き徹つた空の中に、星はキラ／＼と美しく輝いてゐた。そしてその光りは、高山でなければ見られない鋭く強いものだつた。私はその時、ユニオンの四にあつて、ウインター、ビューテ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ィーの一節をふと思つた。さうして、此の乾き切つた私の心に、あの散文詩を暗誦した頃の、若い情熱が再び返つて來るやうにと希望しながら、冴え切つた空をいつまでも仰いでゐた。

二

私は山に來て十日程たつてから、たつた一人の友であつた辻は、翻譯したスティルナーの校正をする爲めに山を下つて東京へ歸つてしまつた。辻の外にもう一人宿院に泊つてゐたKと云ふ京都大學の學生も、辻と一緒に歸つてしまつた。

　その間にも雪は毎日飽きもせずに根氣よく降つてゐた。紀元節の朝には、無想庵氏が失戀の苦を忍んでゐた、北谷の善光院が燒けのこつて、その中に倒れて灰となつた。その失火の原因と云ふのは、無想庵が、山から送つた新聞の記事を見て、山中の生活を慕つて來た青年の過失に初まつた事であつた。觀明院さんや中島君は、失火の證人となる爲めに、その深い山道を下つたり上つたりした。そして宿院には見舞客がぞろ／＼とやつて來たが、それも一日か二日の事で、後は本當に火の消えたやうに、元の靜寂に返つてしまつた。さうして辻は夫れから間もなく、山を下つた。

辻が東京へ歸ると云ふと、子供達も寂しがつた。正覺院の座敷から、阪本の船着場を眺めては、白く塗つた湖南汽船が岸を離れると、

「おぢちやんは、あの船で歸つたのかしら」

と羨しさうに一日云ひ暮してゐるのであつた。私もそれからは尙更に寂しくなつた。午前十一時頃に來る郵便配達が、手紙を持つて來てしまふと、あとはもう語るべき友もないのだ。私は讀書にも創作にも飽きてくると、母家の座敷に來て湖を眺めるのだ。時折、空が美しく晴れた時には、雪の道を踏みしめて、すぐ下の莊嚴院と云ふ寺の舊跡の方へ行く。そこからは、湖水を縱に眺める事が出來るのだつた。

　晴れた時には關西の空は、東京では見られない美しい紺青色に澄み渡る。はるか向ふには雪の伊吹がその美しい空の中に、くつきりと白く聳えてゐる。湖の面も、瑠璃色となつた中に、黑ずんだ、長命寺や沖の島が、ぽつねんと浮んでゐる遠く向ふの若狹路の方は、水に霞んで見えもしない。そして小さな帆掛船が、老松の幹の間を縫ひながら、唐崎の方へ歸つて行くのだ。

　私はいつまでもいつまでも恍惚として眺めてゐる事が多かつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

殊に朝方の日の出の景色は何よりも私を喜ばせた。それは山の雪がだん〴〵に、朝晴れては夕に降ると云ふ風になつてゐた爲めかも知れなかつたが、日の出前に起出して椽の戸を繰り明けると、空は薄緑に晴れてゐる。そして伊賀、大和に連る白い連山の上をすかせて、綠色の雲が平らに廣く閉ぢてゐる。湖水の面も、雲の影を映して鼠色に眠たげな色をしてゐる。阪本唐崎の村の方にも、まだ煙もたゝないのだ。

やがて、薄黃色となつてゐた遠くの山影の光りがだん〴〵に強くなる。そして朝日が正に山の端に、現はれやうとする時には、八荒に輝くと云つた、昔の人の言葉以外に何と云つて好いかも判らない強く勇しい姿である。その頃になると、東近江の小さな山の間から、煙草の煙のやうな薄雲が、どこからともなく、ふわ〳〵と浮び出す。

日がだん〴〵登つて來ると、先づそれ等の浮雲が金色に光つて來る。そして次ぎには、湖の上を閉ぢてたゐた廣い雲が、その背の方はまだ鼠色にしたまゝで日を受けた處だけ、金色に輝くと湖の面も、雲の山も凡てが一時に光り出すのだ。さうして遠い〳〵山の方から、幾つかの山間を、曲りくねつて流れて來る野州川も、その時ばかり長い姿をすつかり見せて、藍地に散らした金絲のやうに、細くきら〳〵と光り初める。

やがて日がすつかり登り切ると、松の梢も家根の雪も、凡てが一樣に輝き初める。

そして私は、その太陽の光を吸ひ込むやうに、二三度強い深呼吸をするのであつた。

夜は月の遲く出る時が一番美しかつた。湖の面も、東近江の田も圃も、眞黑な夜の底に沈んでしまつた時に、對岸の山の端から月が登ると、湖の岸邊の方は、金箔線を取つたやうにきら〳〵と夜の金色に光るのだ。暗い中に聳えてゐる、三上山の麓を走る汽車の光がかすかに光つて見えて來る。そして山の中には音と云ふ音もなくなつてしまふのだつた。けれどもさう云ふ晴れた朝や夜は、月の中にも數える程しかないのであつた。さうしていつもは吹雪ばかりが荒れ廻つて、克は又た

「オーオーオー」と泣く事が多かつた。私は私で離れの方に引き籠つて、陰氣な物思ひにばかり耽つてゐた。

三月に入つてから、寒氣は殊にひどくなつて、六日には大雪が降つて、寒さも又た今までにないほご嚴しかつた。七日には曇つて、八日には少し暖かになつて、空は雨模樣のやうに思はれてゐたが、九日の曉方に少しばかり春雨らしい雨が降つて、その日は一日春の重さの深いやうな日であつた。

そして十日になつて、春は突如として雪の山に訪れて來た。今まで堅く引き緊めてゐた何かの力が愈々なくなつてしま

つたやうに、凡ての物がゆるんで來た。空は暖く美しく晴れてゐる。今まで少しも溶けなかつた家根の雪は、瀧のやうに流れ初めて、軒滴は日に輝いてゐる。

私は久し振りで宿院の庭に行つて見たが、そこではもう雪が溶けて、大地がやつと現はれてゐた。長い間雪に閉ぢられてゐた大地の色に、人は如何に憧がれてゐるものだかは、深い雪に逢つた者でなければ解らない事である。シベリヤに送られるロシヤの囚人が、故郷を離れる時に大地にキッスをすると云ふやうな、土に對する深い愛着は、あの雪の深いロシヤの人でなければ持ち得ない情調であらう。

長い間、固く厚い雪に遮られてゐた土が、今漸く現はれたのだ。これからは命の通ふその土の上を、自由に輕快に歩く事が出來るのだ、と思ふと私の胸には何とも知れない歡喜の情が湧いて來た。殊にそれは、私がその日まで、豫想をしなかつた喜びであつた。突如として訪れて來た春のやうに、土に對する喜びも、その時初めて湧いて來たのだ。

二人の子供は、庭前に堀つた大きな穴のふちの、土塊をくづしてゐる。無心の子供も、土に觸れて喜んでゐるのだらう。土の面には長い間雪に埋れてゐた朽ち落葉を、日はまだ暖かに照らしてゐる。さうして朽葉はまた喜んで土に歸つて行くのだらう。

紺青色の空はます〳〵美しく晴れて行く、湖の面はかすんで、長命寺も沖の島も、夢のやうに霞んでゐる、そして雪の伊吹の姿ばかりが、青い空の中に白く聳えて立つてゐるのだ。

私はまた家に歸つて、妻と赤ん坊とを連れて、再び宿院の庭に來た。誰れも彼れも、いたづらな子供までが、日を浴びてうつとりと默つて湖を眺めてゐる。いつもはたゞギャー〴〵と鳴く樫鳥までが、時々に、コトリンコトリンと木で作つた鈴のやうな聲を出して鳴いてゐる、宿院の二階からは、朝の勸經の聲が靜かに流れて來る外には、物の音もしないのだ。凡てがおつとりと靜かであつた。

こうした穩かな靜かな日には、人は何故年はなければならないのか、此の偉大で柔しい自然の前にまづ出て見ろと云ひたくなる。けれども命の母であるその大地に觸れる事の出來る爲めには、土を蔽つてゐる厚い固い氷を溶かさなければならないのだ。そしてその氷を溶かす熱と云ふのは何であらう？

春はこうして突如として返つて來たが、それからも雪はよく降つた。それは多くは夕暮であつたが、比良の方から來る灰色の雲が山の上に擴かると、粉のやうな雪が飛んで來て。

それは雪の降つた寒い夕方だつた、五十近くなつたらしい遍路の婆さんが宿院にやつて來た。その翌日も烈しい雪だつたので、その婆さんは一日宿院の臺所を手傳つてゐた。そしてその翌日になつて、雪がやつと晴れたとき、又た笈 背負つて歸つて行つた。

私はその朝も、宿院の庭に立つてゐると、その婆さんは、

「あんた方はどこから來てらしやる、ふゝん關東か わしも御蔭さまで、秩父阪東、殘らず詣らして頂いて來た、國を出てからもう八年になるが、四國九州、詣らないとこはないでがすな。これからは、若狹一つが殘つてゐるで、そこだけを詣つたら國に歸らうと思つてゐやすだ。若狹と云へば、はああつちの方かい」と遠い湖の彼方を指してゐたが、

「それではあんたもまあお大事に御暮しなされ」。と挨拶をしてから、阿彌陀堂の前で、ちりー……んと鈴を鳴らして拜んでから、山を下つて行つてしまつた。

雪はその後ち餘り降らなくなつたけれど、中堂の前に積つたのが溶け切るには、四月の末頃までもかゝつたらう。そうして又たその頃には、重苦しい春の憂鬱が、毎日々々 私を苦しめるやうになつてゐた。（をはり）

君達のために、ロシアの勞働者や農民の血が流されたことを忘れるな。

ロシアの勞働者がお互のために三年の間飢ゑと窮乏に苦んだことを忘れるな。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

批評

評論——正俊
小說——洋文
劇——弘二
童話——孝丸
詩——小牧

愚論二種

紀平正美氏が「國本」に於て國家と個人について論じてゐることは、たまく彼がヘーゲル末派の一人であることを示すに止まつてゐる。この論文に於て彼の示さうとしたことは何であつたか。それは全體と個との關係を論じたものである。不幸にして余等と對跡的に思想が異れる、この論文の筆者の缺點を指摘することは、あまりにわづらはしい。一語一句ことごく反對なのである。例へば彼は理論があつて、それがいつか實現されると考へてゐる。余等はその反對であつてある事實から、その事實の示すところをレジュメするに過ぎないと考へる。それは一例である。しかもそれが毎行さうなのである。故にそれを約論することは日として、こゝには彼の思想の根本的缺陷を指摘したい。

彼は一見いかにも理想主義の如く見える。しかもその理想は彼自身の必然から出たのでなくして、彼が一たびはまり込んだ哲學の迷妄から拾ひあげた觀念の集りである。故に彼の口にする「國家」とか「藝術的」とか「抽象」とかが一々事實からはなれてゐる。即ちそれは固定したる觀念論なのである。さうしてその觀念の一つとして「具體的」といふのがある。その具體的といふのは彼によれば、たゞ現在する現實それだけなのである。それはヘーゲルの考へと正に一致する。從つてそれは左黨でなくして右黨である。こゝに於て觀念論者なる彼は一擧にして現在を承認して未來を認めざる現實主義者と化するのである。かゝる現實主義から生ずる「國家」及び「個人」の觀念のいかに余等の理想から遠いかはこゝにいふまでもないであらう。まことに彼はスコラスティクな理論にその眼をくらまされた一哲學者である。

×

「中央公論」は高橋誠一郎氏の「地上に建設せらるべき神の國」をのせてゐる。經濟學者としての氏の才は知らない。少くともこの論文に關する限り、彼は愚人の一人である。一體この論文は何をいはうとしてゐるのであるか。冗長なる數頁はこれたゞ宗教史のきりぬきではないか。余は今日のいはゆる評論家と號する連中がたゞそのペダントリを誇るためにのみ、他書の切りぬき紹介をなすのを知つてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しかも紹介は紹介である最も新らしいものを最初に紹介するこか最も古いものをはじめてこの世に示すならばいゝ。否らずして何人にも常識となつてゐることを得々としてかつぎ出すに至つては、その人の無識をわらひたくなる。評論家が彼の創見を例示するために引くならばいゝ。然らざる限り、愚人のわざである。さうして彼はその業を長々しくつゞけてゐる。

根本的にいへばこの論文は宗教が必要だといふに止まる。こゝに於て、彼が生活そのものに對する理解を缺いてゐることを明示した。宗教の生活に對する意義を知らないで、いたづらに宗教が必要であるといつたところで、それが今日何の役に立つのであるか。

一口にいへば宗教は、古代の人間がその生活の指導動機として採用したものである。今日はそれは科學に代られてゐる。今日の社會主義者が之を否認するのは當然である。しかも彼が歐洲の社會主義者が基督教徒であるのをいぶかるのは、尚のこと彼の識見の低いのを證明するのである。彼はつひに事物の眞相にその眼の徹する能はざる人間である。しかもこれ切りぬき評論家の常態である。

菊池寛氏の立場

菊池寛氏が「新潮」の對話は彼が正しく現代の成金思想に浸り切つてゐるこごをあらはしてゐる。それは現代ブルジヨワジーの間にあつて、かつてプロレタリアにゐたものが苦心してその境地に達したときに有する思想である。それは他の言葉を以つてすればビユロクラシであり、ブルジヨワジーであり、さうしてしかもある意味のデモクラシーである。彼は現代の特權を享受するにも足らざるこごを恐れると共に、それを失ふのがこはいのである。

一口にいへば彼こ余等こは全く反した見地に立つてゐる。彼が是認する一切のこごは余等の否認するすべてゞあり、彼の否定する全部は余等の肯定する全部である。彼は新しい價値を認める能力がないと共に、自巳に自惚れきつてゐるが故に、現在の小さな技巧の價價のみを知つてゐる。彼がバルビユスを讀んで判らないのも當然であると共に、日本の小說、日本の小說と自慢するのにも理由がある。余等は自我主義者であるが故に、外國の批評家をまつ必要はない。たゞ事實を述べるのである。その事實を認める能はざる彼は、つひに過去の人間であり、少くとも現在するところの特權階級の思想に混亂されてゐる人間なのである。この對話を細部にわつて論ずるのは愚の至りである。

三島君の小說を讀む

＝解放の『寺田屋騷動と三人兄弟』＝

作者は材料を大きく考へ過ぎたやうである、そこで根限り凡てを書き出さうとしたらしい。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三島君の筆致は新鮮で簡潔である、若い作家に見る誇張癖もなければ、ある人道主義者達に感ずる嘘もない、だから作品の部分部分をひき出して考へると、この作品は少しもゆるみのない、緊張したものに考へられる、事實全篇を通じて作者の精神はいきり立ち、燃えたつてゐる、一寸さわつても血が出さうである、作者はこの材料の全體にわたつて大きな興味を持つたらしい。

けれ共、尊王論に熱した志士達の所謂奮闘談は、作者の新らしい理解のもとに生み出されたものでなかつたら、近代人にとつて、決して強い刺戟となつてはいつて來ないのである。

とは言ふもの丶、私は決して三島君が何等の新らしい理解を持たずに、この作品を生んだものとは思はない、それどころか作者が終局に於て

『うん、よか。己達な、己達のやる可き仕事を立派にやつたんぢや己も、Kなあ、汝も——。そいかあMもやつたんぢや、何も思ひ殘すことは無か、何も思ひのこすことは無か、よか、よか、うん、おいどんな、人間の役目を果したんぢや、此天下の事は、又この次の奴にまかせりやよか。今の奴等がだめなあ、その次に產れてくる奴等は、よかぢやろ、己達の孫か曾孫か。其等が天下の事は又、己達の如く考へて、しつかい、やるぢやろ。——なあK、おいどんは、おいどんの役目すんだぢやあ!』

と、Sに言はせてゐるのを見ても充分作者の創意を肯くことが出來る。けれ共この作品は作者の新らしい理解を中心として表現されないで、材料に對する感興に餘りに支配されてゐる傾がある。だから、時代の進化と、その進化に伴ふ革命を是認してゐる作者の眼は片隅に押込められてゐる感がするのである。

『それは不得止ない』言ふなら、私はこ丶でこの作品と袂を別たなければならないだらう、何故ならこの材料はこの思想をとり除いては我々の生活にとつて、講談に出て來る志士の斬合と何等の差異がないからである。

この作品はこの終局に表示されたSの言葉を中心として、あるひは背景として書かれねばならなかつたと思ふ、從つて私が冒頭に言つた、材料を大きく考へ過ぎたといふ批難が起つて來るのである、作者が大きく考へなければならないのは材料でなくて新らしき思想である。時代の進化と、進化に伴ふ革命に對する考察である、序曲や、志士の斬合は寧ろ追想となる方がい丶、でなかつたら、半分以上にきりつめるがい丶、辭世を一人一人書いたりすることは、讀む人を退屈さするばかりである。

私の批評は大事な焦點を失して、作品の思想や、表現の巧拙にばかり關り過ぎたやうだ、而し私がこの作品に眼を通して批評を書く氣になつたのはこの作品に流れてゐる作者の純眞な心にひかれたからだ、嘘のない、生一本な表現に感心したからである。

何故なら、私達は文壇の所謂人氣作者のふやけた作品に膩まされきつてゐるから——

藝術家としての三島君のテンペラメントは優しいといふ言葉でつきる樣な氣がする、君の持つてゐる魂の優しさは、君が學んだ思想や、君が持つ近代人の惱ましい生活に對する理解以上である樣な氣がする。であるから、私の臆斷であるかも知れないが、君が生み出す藝術は優しい魂が屆く世界に限られてゐる樣に思はれる。

而しこのことは非常に大事なことである、澤山の批評家や藝術家達は力に充ちた作品や、情緒のあふれた作品を求めることを知つて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れ未だ一度も優しきものに眼を注がれてゐない、そしてその世界は全く忘却されてゐるのである、一本の野の花と海と比較することの愚かであるごとく、野の花より海が偉大であるととくことは、更らに愚かである。日本の文壇はかつて天才といふ大きな聲におびやかされ今ではその反動としてふやけた遊びに充たされてゐる。

私は過去の一切を蹂躙る力强きものを求めると同時に、雨に等しい優しきものを限りなく望んでゐる。（一二、九、一一）

戯曲 切支丹ころび

「種蒔く人」の創刊に當つて、僕は戯曲評を擔任することゝなつた。然して今回は「改造」九月號所載の高倉輝氏「切支丹ころび」評をしやうと思ふ。要はその評だけでよいのだが、最初のことではあり、少しく詳しく述べやうと思ふ。

一、

最近の文壇が殆んど末期の文壇であることは、又文壇革命の必要であることは、文壇革命が或る意味に於て社會革命の前提であることは、他の場合で僕は數度述べた。幾度び言ふのも同じことであるが、現下の文壇は眞に末期の文壇である。墮落し切つた文壇である。

勿論、眞に尊敬すべき幾人かゞないといふのではない。けれども、その人々までが今や疲勞の狀態にあるか、又は不必要の人物になつたりして終つた。といふのは、それ程までに現代は他の或る物を渇望してゐるのである。社會が惡く停滯し行きづまつたのである。僕等はそれを當然突破しなければならぬこと勿論である。

かくの如く一度び腐敗し、墮落した支配階級作家が、再び清新なる新價値の創造に參與し得ないことは、社會現象の場合と全く同一である。僕等は腐敗の極に達した文壇を棄て、社會主義者としての立場から他の文學の創造に努力する。就中、革命的センヂカリスムである。センヂカリストの藝術は世界主義の藝術である。若し、今時の文壇に滿足し、喜悅し、熱愛し得るとしたならば、それは矢張り現下の社會に滿足し、喜悅し、熱愛する浮薄な近代人の徒輩である。言ひ換へれば、無條件で資本主義を隨喜する徒輩である。こんなことは、今僕が言ふまでもなく餘りに明白なことである。

僕等が熱望するものは、プロレタリアの精神を基調とした新藝術である。それは民衆の總らゆる意味の解放に他なく、舊來の文壇の如く、人生に光明を發見し得ないもの、又は發見しやうとも思はないもの、人間の苦痛を知らないもの、又は知らうと思はないもの、それ等の人々の或者は本でも澤山讀んで新技巧などいふケレンを案出する。僕は今讀書を否定するものではない。が、書齋の人生觀はもう僕等には不必要になつて終つた。或るものは出鱈目な思想を技巧の先端に駈つて、名人主義を稱へる。遠藤波津子が低腦の姫君に如何に巧なる紛飾をほどこしてやつても、低腦は依然として低腦である。

二、

かういふ變な前觸れをして置いて、僕はいよ〳〵『切支丹ころび』に這入る。高倉氏は去年の暮に一篇の戯曲を發表され、何か最近に著書もあるやうである。が、文壇的には新進作家と言ふべきであらう。そんなことは何うでもよいやうなもの〻、實は僕が次に書はんとすることのためには尤も大切なことの一つであるから、敢て此處に一言するのである。

新進作家の意義については、村松正俊が讀賣新聞で嘗て述べたことがある。僕もそれに同感であつた。少なくともエポツクを作つてくれるものでなくては新進作家としての意義がないので、今迄の文壇の延長では單に時間の延長、時期の延長、といつた屁放つたやうなもので、尊敬に價しないこと勿論であり、何等の意義なきものである。

物を一つの典型に箝める必要は毛頭ない。又箝めてはならないことは僕も知つてゐる。が、第一節に述べたやうに現下の文壇が已に死期に近づいてをり、當然勃興すべき藝術が如何なるものであるか判明した時、僕等は其處に當然の要求としての新進作家への注文があるのである。これは勿論當然の要求であり、新進作家たるものも亦それだけの覺悟がなくては叶はぬものである。僕が最近發表された戯曲のうち、長與善郎氏の『インドラの子』やその他のものを選ばないで、特に『切支丹ころび』を選んだ理由も、一面新たな道への進路の爲めにあつた。然らば、『切支丹ころび』はこれ等の條件に叶つてゐる藝術であるか、それとも最早や不用の文字であるか。

僕は一口に不用の文字であると斷言し得るものである。この言葉は輕卒であるに相違ない。が、僕は今輕卒と知りつゝ敢てから言つて置くものである。

三、

僕は一度讀んでから、頭のせいではつきりしないのかと思つて二度讀み直して見た。けれども、それは矢張り無駄であつた。それは全體の感じが非常に生で、混雜してゐて、統一がなかつたからだと思ふ。一口に言へば、これだけの題材、こんな性質の題材を持つて來て、こんな解釋の仕樣をしたといふのは、僕等の考へ方と原作者との考へ方とが餘程かけ離れてゐるやうに見えてならない。基督教の傳來初期に於ける九州有馬の狀態、それから生む悲劇、それは題材として好箇のものである。僕には、この戯曲がそんな意味に於て或種の興味をもつて讀まれたにも拘はらず遂に不滿足のうちに讀み終らねばならなかつたといふものは、高倉氏のこの問題の取扱ひ方には、次の時代への何等の暗示もなければ、閃きもない。その意味に於ても、今迄ざほりにありふれた自然主義の作品といふより他に何物もないものである。こんな點は時代ものを取扱ふ人の尤も注意すべきだといふ。そのとほり、氏は歴史家でありなが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら、眞に歴史を知らない人だと言ひ得るのである。今度の場合の如きも、折角こんないゝ題材を摑まへて置きながら、かう時代その物にかぢりついて終つてゐては、到底意味をなさないのである。自然主義に墮して終ふ所以である。

もと／＼信者であつた直純が切支丹を棄てゝあべこべに信者を焚殺するまでの、尤も重大な心理的經過が、一寸口にされてゐながら甚だ明瞭でない。僕には單なる狂人のやうに思へてならない。千々岩の態度だつてさうである。五齣にある。

『さて、拙者はもう行かう。右衞門佐どの。お身達二人はやはりお身達二人だけの行くべき道を歩いてゐられる。これまでは何かと障碍があつた樣子だが、結句さういふものは一時の事だ。いよ／＼お身達二人だけの道になつた。畢竟お身達二人は一艘の船に乘り合はして、遙かな海の旅へ乘り出した二人の船人ぢや。結局、何時までも二人だけの旅を續けて行く。どんなに憎み合つてもゝがいても、其の二人の船から外へ出るだけは出來ぬのぢや、拙者などは只だふと立ち寄つた見知らぬ港かそれとも遠くに見えた離れ小島のやうなものだ。船は矢張り何時か港を出て、二人だけの船路を續けて行く。あゝ。昨夜から今日へかけては拙者の爲めにも怖ろしい一日であつた。何か怖ろしい惡夢に魘なれた樣な氣持がする。此の氣持は命の際までも忘れはしない。右衞門ノ佐どの。さらばぢや。お假名の方さらばで御座る』

僕は高倉氏が千々岩にこんなことを言はせた氣が知れないと思つてゐる。千々岩の個人主義は眞に唾棄すべきである。この言葉は、實に氏自身の矛盾であり、千々岩の矛盾であり、ひいては切支丹の矛盾である。一體、直純夫妻があのまゝ航海し得るものであらうか。またさせていゝものであらうか。而も、氏は矢張り二人を航海させやうとしてゐる。そして、自分は惡を見すくめながら、逃げるやうにして。

其他、細部の缺點を洗へば幾らでも出て來る。その一二の例として擧げるべきは、獅子丸といふ犬である。僕には、遂に犬を持つて來られたことが分らなかつた。此處では、犬が可なりの役目を持ち、又働らいてをりながら。伊賀流の忍術も馬鹿らしいものゝ一つである。

要するに、陣容の堂々たるのみで、これだけでは結局何のことだか僕には分らぬ。僕の批評も隨分と切れ／＼で纏らなかつた。理路立つたものではなかつたが、要點だけは摑むで、羅列して置いた積りである。最後に氏に潛越ながら言つて置かねばならぬことは、氏が眞に歴史を知ることである。それには、もつと科學者となることである。これだけ言へば、氏は僕が言つた意味が何處にあるか分つて下さるものと思ふ。若し氏が判らなかつたら、氏は恐らく低腦である。今回はこれだけで失禮する。（一〇・九・四）

童話集 夜明け前の歌

愚劣な臆病な官憲のために、理不盡極まる犬糞的取り扱ひを受けて、先頃日本を追放された盲露人ワシリイ・エロシエンコ氏が、狭い土地を去るに當つて、日本の同胞への置土産として殘して行つたのがこの創作童話集『夜明け前の歌』である。

『狭い籠』以下『カナリヤの死』に至るまで、十四篇の童話が収められてゐるが、先づ第一に云ひたいのは、茲に收められてゐる全ての童話が、謂ふ意味での『童話』では無いといふことである。少くとも現在の日本で、現在の所謂童話作家の大部分の人が口にしてゐる意味での『童話』でないといふことは明かである。

けれども、自分は今茲で、『童話とは何ぞや』といふ題目を討究するのは姑く避けたい。そして、この十四篇の話の中に盛りこまれてある作者の思想に就いて少し書いて見たいといふ。

篇數にして僅かに十四、枚數にして、僅かに四六判三百頁を數ふるに過ぎないこの書の中に、作者は、作者の持つてゐる殆んど全てのものを現はしてゐる。

『我武者羅なエロさん』『無邪氣なエロさん』『議論好きなエロさん』『哲學者のエロさん』『社會主義のエロさん』等、『エロさん』の殆んど全部が現はれてゐるのであるが、特に、どの篇にも共通して良く現はれてゐるのは、秋田雨雀氏も序文で云つてゐられる通り、『詩人のエロさん』『美しい夢を追ふ詩人』のエロさんである。

かなり露骨過ぎると思はれる程に、眞正面からイデオを說いてゐる場合にも、其處には必らず、作者の美しい詩が附き纏つてゐる。美しい然しながら淋しい夢が結ばれてゐる。

そして、この美しい詩、美しい夢の基調となつてゐるものは、瞬時も作者の胸から消え去つたことの無いと思はれる無限の自由への欲求である。試みに、この十四篇のうちのどれ一つを讀んで見ても、其處には必ず、その取材その題目の如何に拘らず、常に限り無き自由を求めて求め得られない作者の魂が、或は憤りの詩となり、或は淋しい夢となつて現はれてゐるのを發見することが出來る。就中、卷頭の『狭い籠』一篇は、悉く是れ自由を求むるもの丶デスペレートなもがきと、奴隷生活を強ひられるもの丶限りない憤りとを詠つた詩である。

『狭い籠』を私は涙と血とで書いた――と作者はその自序の初めで云つてゐる。

虎が疲れた……。

毎日々々同じこと……。

狭い籠、籠から見える狭い空、籠の周圍に見渡す限り又狭い籠……。

これが、この『狭い籠』の書き出しである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

虎は檻を破つて外へ出た。廣い野原の一角に羊の牧場があるのを見た。

『籠、狭い籠……』

虎は憤つて垣を破つた。けれども羊は虎と共に逃げやうとはしなかつた。虎は又カナリヤの籠を見てこれを破つた。だがカナリヤもやはり逃げやうとはしなかつた——其處に壓迫され續けて來たもの丶奴隷根性がある。奴隷生活を强ひたもの丶暴虐に對する虎の怒りは、奴隷生活を强ひられたもの丶怯惰な卑屈な精神に對する憤りと變つた……

この作は作者が日本で書いたもの丶うちの最後のものである。或る意味に於て、絶筆であると云つても良いのであるが、さて、この一篇の中にある奴隷根性に對する虎の憤りは、直ちに作者の憤りであると見て差し支へない。即ち作者は、日本人の奴隷根性に愛想をつかしたのである。目前の安逸を貪ることにのみ汲々としてゐて、眞理の世界へ、自由の世界へ勇敢に突進することの出來ない日本人の愚圖に呆れ返つたのである。そして、偶々、眞理を探求し、自由を追及する勇敢な戰士が稀に現はれても、彼は遂に一般の社會から、一般の人々から、限りない侮蔑と、限りない嘲笑と、限りない迫害とを受けねばならないのを見て哭かざるを得なかつたのである。

日本人である自分は、今日の日本の社會に生きてゐる自分は、エロシエンコのこの憤りとこの絶望を、至極當然なことゝして認めねばならないのを悲しく思ふものである。——それ程、今日の大多數の日本人は奴隷根性に墮してゐるのだ！

『かなりやの死』で、作者は所謂社會主義者の醜い偏狹な一面を描いてゐる。鳥の社會主義者達は、カナリヤの服裝が金色であるといふだけの理由で、カナリヤを容れなかつた。作者は又この一篇で、自稱自由思索家、自稱自由戀愛主義者にも一槌を下してゐる。それから、『主義』をパンの代用にする所謂社會主義學者をも辛辣に皮肉つてゐる。カナリヤの青年が雀の博士の許へ『御高説拜聽』に出掛けた時、雀の博士は、ちよつと話をした末、

『あゝ我輩はもう少しお話をしてあげたいが、これから共産主義を讃美し、引き續いて專制政治を謳歌する演説をしなければならないから……』といふやうなことを云つてゐる。

『無宗教者の殉死』では、『家系』とか、『血統』とか、『身分』とか云ふものに固執する祖先崇拜の愚をわらひ、同時に既成宗教を否定してゐる。

自分は、エロシエンコと交はつてゐた間、宗教の話になると、氏がどの程度にまで徹したアテイストであるかといふことを常に疑つてゐたのであるが、今、この『無宗教者の殉死』を讀むに至つて、氏のアテイスムが、かなり徹したものであることに氣付いて愉快に思ふのである。

今までに擧げたこの三つの作品、及び『沼のほとり』『恩

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寵の濫費』『學者の頭』その他の作品は、概して、作者が客觀的に見た社會の批評といふことが出來る。が玆に、作者自身の主觀的惱み、主觀的苦しみを描いたものに『松の子』一篇があることを見逃してはならない。

自分は、この『松の子』といふ短いものを讀んだ時、實は、ほんとのエロシエンコ氏の魂に初めて觸れたやうな氣がしたのである。云ふまでもなく作者エロシエンコ氏は四歳の時から視野を遮られた盲人だ。

盲人は不具者である。然し、肉體上の一部が不具であるといふことは、その全體が不具であり不能であるといふことにはならない。況して、肉體の不具が精神上の作用を碍げるといふことはない。(それに大きな影響を與へ、常人と異つた作用を起させることは確かであるが)

生れながらの盲人は戀をすることが出來ないものだらうか？生れながらの不具では、人なみの幸福を(結婚生活の――若くは戀愛生活の――幸福)求めることは出來ないのだらうか？目の見えない若い女は、目の見える若い男を愛しても、遂に自分の戀を完うすることは出來ないのだらうか？目の見えない若い男は、目の見える若い女を愛してはならないのだらうか？すべてそれ等のことは分不相應な潛越なことなのだらうか？犧牲とは何であるか？何故に犧牲といふ行爲が斯くも讃美せられるのであるか？……

エロシエンコ氏の胸の中に、右の疑問が、時として潮の如く押し寄せ、且つ氏を惱ませたであらうと云ふことは、推定するに難くない。そしてこの疑問、この惱みが、氏をして遂に『松の子』一篇を書かしめたのであらねばならぬ。

この篇に於ける『エロさん』は、全く『詩人のエロさん』である。玆では、氏は殆んど他の諸篇に見る如き説教をしてゐない。而して單に盲人の戀に對する惱みだけではなく、戀以外のものに對しても、盲人の抱くべき慘ましい惱みが『松の子』の口を通して、屢々讀者の胸に迫つて來るのである。

生れながら松の木の根方に捨てられてゐたゝめに、みんなから『松の子』と呼ばれてゐる盲目の娘は、自分を育てゝ呉れたお婆さんに對して、色々なことを訊ねる。然も『お婆さん光つてどんなもの？』と訊く點にまで來ると作者の境遇を知つてゐるものは、誰しも顏を外向けずにはゐられまい。

松の子は眞ちやんといふ樵夫の息子を心の底から愛してゐた。が眞ちやんは盲人ではない、……若し自分の戀を打ち明けて、眞ちやんが憫みの情から自分の戀を受け容れて呉れるやうなことにでもなつたら、盲人の自分を妻にする眞ちやんは不幸ではあるまいか？……人間は、何故自分の幸福のために、自分の欲することをなし得ないのであるか？……其處にエゴとヒユーマンの鬪爭がある。

作者は遂に松の子を自殺させてゐる。恐らくは作者自身も自殺した氣で書いたのであらう。

エロシエンコ氏は今赤露のチタを越えやうとしてゐる。或はもう越えてゐるかも知れない。自分は、氏が、心の温い、心の美しいウクライナ婦人を早く見出されんことを希ふものである。

氏の作品に就いて云ひたいことは未だ〳〵澤山あるが既に豫定の紙數を超過してゐる。その第二集『最後の嘆息』が出た時、再び稿を改めて書くことにする。そして最後に、

Vero ne mortis, vero ne mortas
vero ne mortos.

といふ簡單な平凡な然もほんとの言葉を、漂泊の旅程にあるエロシエンコに贈りたいと思ふ。

詩「少年時代の思出から」(白樺)

僕は何となしに千家元麿氏の詩が好きだ。苦がなくすらすらと書けてゐる氏の詩が好きだ。それで題材がいつも單純である(僕は數多く見てゐないのだが)それでゐて、捕へたものをよく逃さないでゐる。ほんとに苦がなさそうに見える。それでゐてそれが非常な力になつて見える。九月の白樺には四ッの詩と一つの散文が載つてゐる。その內で「少年時代の思ひ出から」のことを言ひたい。僕はあの頃十一か二であつた。僕は北國に生れてゐたもので、それはひどかつた。あゝ忘れてゐた。「少年時代の思出から」は詩人が日露戰爭の當時の思出である。忠良なる臣民が停車場に兵士を送つて行つた有樣を書いたものだ。僕は言つた。僕は北國に生れた許りで毎晚の見送りでひどい目にあつたと。しかし僕達よりもつと迷惑な小國民がゐたのだ。彼等は三里も四里もある村から十二時とか一時とか云ふ眞夜中、道もない雪の中をふう〳〵言いながら殆ど毎晚出て來たのだそれだのにこれ等の小國民は町民の大部分や高等科の生徒が殆ど全部送るので、無論呑氣に待合室などに居られなかつたのだ。それでこれ等の忠良な小國民たちは提灯の火に凍えきつた手をかざしてゐたのだ。僕達、この町の小學生達はほんとに村の忠良な小國民たちに同情した。僕たちには、兵隊さんを見送つて家に歸りさへすれば、暖い火と、冬のことだから餅位は常にあつたのだ。それに人間は何んと云ふ冷淡な動物だらう。幸ひ僕の家から誰れも出征しなかつたので、見送りの時は人並に安價な淚を流してゐながら、そのあとで自らに耻ねばならぬこともあつた。しかし今になつて思ふ。あの時はよくも圖々しく旗を振つたものだ。しかし僕はこれだけは、僞でなかつたことを言つておく。僕はあの他村の忠良な小國民にはあの當時、どんなに小さい胸を痛めてあつたかを。

これは、いつもながら柔い筆でかゝれた、千家氏の最後の句、

　この悲壯な感じは忘れられない
小さい停車場の內の冬の夜の悲しい混雜も今尙眼に浮

ぶ

自分はどんなに小さい胸を痛めたらう

を讀んだ時の感想だ。多くの詩人は昔のことを書くにしても、現在の氣分になり勝なものだ。それは誰だつて、昔の氣持で書きたい希望には異ないが、つひさうは行かぬものらしい。その意味で千家氏の「少年時代の思ひ出から」は昔のまゝの感じだ。その證據に僕までをも昔の氣持にしてしまつて、こんなものを書かした。

お前等の娘たちを見ろ
蒼ざめたあの頰をよく見ろ。
お前等の伜たちを見ろ
痩せこけたあの腕をよく見ろ。
卑下された彼等の心を見てやれ。
仲間、父、母、ごちやまぜな共同の墓穴をしつかり見るんだ。
さあ、戰爭に行くなら行つて見ろ。

——マルセル・マルティネ——

次號內容

—革命ロシアをうたふ—

僕達は、ロシア革命の意義がどうであらうと、十一月七日を無意味に過すことは出來ない。ロシア革命は、ロマン・ローランも云つてゐるやうに、ロシアだけの革命ではなくてもつと廣いことを意味してゐる。これは何人も否定することが出來まい。

僕達は、廣い意味での革命ロシアをうたふことにした。十一月號には、**省吾**、**正夫**、**宗治**、**碎花**、**柳虹**、**淳三**、**康文**、**治郎**、**正義**、其他諸氏の詩、**雨雀**、**未明**、**資夫**、**一夫**、**菊榮**、**市子**、**黑石**、**初之輔**、其他の諸氏の小說、戲曲、評論、感想の外、現在ロシアの漫畫を入れ、猶ほ批評、世界欄には一層の色彩を添ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

勞農露國の大飢饉

勞働露國の大凶作は今や世界の大問題となつてゐる。マキスム・ゴルギーは已に七月十八日附のモスコウ電報を以て全世界の良心ある人達に救濟を求めてゐる。

『南露西亞の穀物の豐饒地であるあらゆる草原が、大旱魃の爲の不作ですつかりやられてしまつた。露西亞國民の数百萬人は、今や餓死と飢饉との大災禍の脅威におのゝいて居る。大戰と革命との爲に疲れ切つて、病氣に對する抵抗力と肉體の耐久力が恐ろしく減殺されて居る露西亞國民の上を考へて吳れ◇凄慘の日はトルストイ、ドストエフスキイ、メンデレイエウ、パヴロウア、マゾルグスキイ、グリンカ其他世界知名の人ゃの國土の上に來たのである。私は敢確信する、此の露國民の悲慘を考察した文化歐洲と米國民が、取敢えず麵麭と醫藥とを以て救助に着手するであらうと云ふ事を◇もし呪ふべきあの大戰と、敗北者に對するあの勝利者達の無慈悲に出て播がされた歐米の社會的意義に關する信仰――卽ち人道的な思想と感情――其の信仰が、もし恢復されねばならぬものならば此の露西亞の悲慘こそは、人道主義の活力を表明するのに、まさに最高の機會を提出したものと云ふべきである◇予は考へる。露國民を救助する暖かい同情は、取り分けて大戰の間に、橫暴な憎惡を熱心に説教してそれによつて、骨の析れる勞苦の中に、人類の中に醗酵されるところの思想の教育的効率を涸渇して了ひ、且つ脅かさせ食婪とによつて、輕蔑にもそれを殺戮した處のそれらの人々の手によつて禁されればならぬのであると◇此の世界の大苦惱と大苛責とを考へてくれる人々は、また私の言葉の峻刻であることを餘り氣にせずに許して吳れるであらう、私はあらゆる公明な歐洲人と米國人が、一刻も早く露國民を救助せんことを懇願する、麵麭を與へよ、そして醫藥を與へよ』

モスコーで、　マキシム・ゴルギー

同じくチホン、大主教は訴へてゐる。

『露西亞は大飢饉である、我が國民の大多數は、今や飢饉と死の運命に苦しみつゝある、嘗ての露西亞の穀倉であつた各地方の穀類はみんな大旱魃の爲に燒き盡くされて了つた、飢饉から傳染病が生れる何よりも一番緊要なものは最も手廣い救助である、其他の凡ての相談は當分はまあほうつて置かなきやならん◇國民は死に瀕して居る農作物も死に瀕して居る、農民が家庭を棄てゝ、國土を棄てゝ、田畝を棄てゝ、農園を棄てゝ、離散しつゝあるからである、麵麭を求めて泣き乍ら東方へ逃散りつゝあるからである◇もし救助の手がのびるものなら未曾有の大災害が屹度湧いて來る、卽

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

刻直ぐ麵麭を贈つて吳れ、醫藥を贈つて吳れ、禱ります、神樣の御怒りを避けるやうに、どうか早く。

モスコウ及び全露國の大主教

チホン、署名 讀賣八月廿八日）

數百萬の生靈を平氣で見殺すと云ふことは由々しいことだ。それが共產露國であらうとブルジョア軍國であらうと。これは政治上の問題ではない。勞農露國ではこの際政爭の臭味を拔きにして救濟委員會なるものを作つてゐるが、その顏觸には立憲民主黨のキシユキンやプロコポヴイツチ、トルストイの娘アレキサンドラや其他がクラシン、カメネフ、ゴルギーなどと一緒に働いてゐる。尙ほ勞働政府は諸官憲に同委員會を支持す可きことを命じてゐる。この際あらゆる手際の政策によらねばならない。トロツキーは去月三十日に催された莫斯科ソヴイエツトの臨時會議に於て飢饉の現狀に言及して曰く、「富裕なる國々は事實露國を援けんとはせずたゞ救濟の空言を事とするのみである。露國は宜しく自力に賴るべきである」と。勞農露國は內爭と外敵に弱つてゐる。世界の勞働者、無產者は世界革命の前衞である所の赤色露國の餓死を傍觀す可きであらうか。或國の勞働者は一日の無給日を以て、饑餓に瀕せる同胞に穀物と醫藥を送らうとしてゐる。我々は露國の勞働者が要求もせぬ兵士を送ることによつて滿足が出來やうか。露國の勞働者はパンを求めてゐる。

赤色露國と學者

外國では赤色露國は野蠻國だから學者を極めて冷遇してゐるやうに言つてゐる。これは佛國共產黨員ボリス・スヴアリンが最近モスコウで文部人民委員ルナチヤルスキーとの對話の一節である。ルナチヤルスキーによると、最近モスコウで大學及び高等學院の代表の委員會があつて、ソヴエツト政府は學者達を出來るだけ物質方面の緩和に努力してゐると云ふ學者の報告があつた。學者には特別な日糧があつて現に三八○○名はその特典に浴してゐる。學者は又勞農露國が或る國々と通商を開始されるやうになつてから直ちに外國から色々な必需品を購入する便宜を得た。ルナチヤルスキーは外國の大學及び學院が露國の學者と昔の關係を持續してもらうことを希望してゐる。經濟上の困難のために露國では實驗場や氣象臺を舊狀に恢復することは一寸之かない。それに最近購入したにはしたけれど、外國の書籍や出版物に缺乏してゐる。しかし勞農政府は學者の留學に出來る限りの便宜を與へてゐる。言語學者ゼリンスキーとアルテールは最近歸國した。その他有名な學者達はヨーロツパに出掛けてゐる。ブラウン教授はライプチツヒに、オリヤンタリストとして聞えてゐるチエルバツキーはストツクホルムに、ロツジエトヴエンスキーはオランダに又言語學者のパヴロフは近々アメリカに出發する筈である。尙廿五名の學者は文化的關係を結びつけるためにヨーロツパの諸國に向ふことになつてゐる。最後にルナチヤルスキーは言つてゐる。野蠻國である所の勞農政府の學者に對する態度は今も話した通りだ、反動的ブルジョア文明國が何う云はうが、一切問題にしてゐぬと。

「エスペラント」か「イド」か

「エスペラント」か「イド」か。國際語の撰擇に就いては未だ解決がないやうだ。「エスペラント」は最も世界的である。そ

の意味に於て「イド」は「エスペラント」—の後進である。しかし「イド」側から言はせると「エスペラント」はその用語は國際的でありながら、その色彩は非常にナショナルであると云ふのだ。我國のエスペランチストの頭株なども、この頃ことにエロシエンコ以來エスペラントの赤化を杞憂してゐるそうである。とにかくイデストは革命的國際語だと力んでゐる。「イド」には國際的團體"Emancipata Stelo"と云ふ組織があつて、それが世界に十九ヶ國の支部を有する。

しかるに最近エスペランチストの革命分子が集つての八月プラーグで第一回の世界大會を開くこととし Esperantista Laboristo 誌の主幹 E. Adam がこの程アンリ・バルビユスに書を送つて、同大會の會長になつて欲しいと申込んで來た。バルビユスの返信に「君達の國際的團體は不徹底とブルジヨア氣分のエスペラントに新らしい系統の紀元をつくつた」と。但しバルビユスは用務多忙のために出席は出來ないが、會長に推薦した厚意を感謝してゐる。

そこで、革命的國際語として二個の用語が並存することになつた。革命的「エスペラント」と「イド」と。そして前者は八月プラーグで後者は同じ八月ウヰンナでそれぞれ大會を開くことになつてゐる。僕達は材料が手に入り次第遂次大會の模樣を報告したい希望であるが、讀者の中でもそう云ふものを手にしたら皆のために御知らせを請ふ。日本のプロレタリアは語學の研究に困つてゐる。だから尙のこと、僕たちはブルジヨアでない方の國際語を選びたい。

瑞西より——

小生は六月の末に瑞西を立つて獨逸丁抹を瑞て瑞典に行き各地の視察の旅行に加はり本月初め復こゝ瑞西に歸つて來ました。今度の旅行は種々の意味に於て面白くもあり有益でもありました。瑞典の工業を見て又制度文物を調べ得た所も一通りではありませんでしたが各國の間に多くの知已朋友を得たことは此上もない幸福でした。第三アンテルナシヨナルに對してアムステルダム側は盛んに反對宣傳をやつて居ます。

アヴデスースト親子とは旅行中毎日食卓を同うして時には議論をしたり、笑談をいつたり皮肉つたりして暮しましたが此先生達はロシア語のパンフレットをどんどんロシアに送り込んで居る樣です。ロシアは國內改造を思ひ切つてやりましたが他の各國が同樣の制度をとらない限り成功には多大の困難があると思ひます。もう一つは大戰と內亂と流行病と凶作で多くの人を殺した事です。今年は歐洲は近年にない旱天つゞきで當地でも百姓は弱つて仕舞つて居ますがロシアの慘狀はその極に達してゐるやうです。私の考では世界の市場はドイツの囘復で嚇かされて居ますがドイツの囘復はロシアに依るのでロシアの將來が全く世界を今後支配する樣です、どう思はれますか。歸途ドイツではベルリンの勞働組合や勞働紹介所などを訪問して見ました。共產黨はまだ振ひません。プチの騷亂後ずつと弱つて仕舞つたのではないでせうか。ミユンヘンへ出て革命の跡を訪れました。バエルンは大體農業國です。ここで革命が起つた其原因や運動の經過はきつと……日本のリアクショナリは大變な勢ですれ歐洲の方は大低絕頂に來た樣ですからこれからよい加減の所へ戾りませうそして日本のもまた變るでせう。日本の友愛會の國際組合參加はどうなりましたか。アメリカは脫退しましたがアムステルダムでは大して氣にも止めて居ません。今はフキムメンが主な仕事をやつて居ます。日本で第二アンテルナシヨナルと第三との割合はどんなものですか……（Y生）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方欄

爭議の跡を訪ねて

神戸より(第一信)

嚴めしい點呼の令狀を受け取つて故郷への歸途今此處へ寄つた。先づ第一に今度の爭議の鬪將賀川氏を葺合の貧民窟に訪れる。不在であつた。

ロンダ組に神戸勞働新聞の安谷寛一君を訪れやうと思つたが、所在が更に不明だ。點呼を受けてから歸りに又寄つて見る。

(第二信)

點呼を濟ませて今再び此處へ來た。

點呼と云へば、執行官(陸軍中佐)の愚劣さ加減に今更ながら呆れ返つた。一體、ミリタリズムに中毒し切つてゐる軍人なんてものは、唯默つてミリタリズムだけをプロパガンダしてゐればそれで良いのだ。ところが彼等は、なまぢつか、雜誌や新聞によつて與へられた半可通な淺薄な『新思想』(と稱するもの)を振り廻して、やれボリシエヰキがどうしたのアナキズムがどうしたの、コムミユニズムがどうしたのと、まるで無智な田舍の青年に對して、却つて彼等がプロパガンダしやうとするもの(ミリタリズム)とは反對のものをプロパガンダしてゐるのだ。これは、僕等にとつては甚だ有難い次第だが……

話が横へ飛んだが、今、やつと神戸勞働新聞の所在を探し當て、訪れて來た。

日本式アパートメントの一室を借り受けて安谷君はごろりと寢轉んでゐた。(云ひ落したが、このアパートメントは、今度の勞働爭議で、一番猛獸的暴威を振つたと云はれてゐる相生橋警察署のつい目と鼻の先にあるのだ)

『安谷君居ますか?』

扉の傍に立つてゐる詰襟の服の男に斯う訊れたら、その男は、

『えゝおゐでゞす。』と云つて、○氏そつくりの容貌をした安谷君を指示しながら、

『どちらから?』と訊き返へされたので、

『僕は東京から來たS――と云ふものですが……』と答へたら、その詰襟の男は扉を離れた。

僕が安谷君と話してゐると、詰襟の男は又扉を排して這入つて來た。僕はその男が、勞働新聞の一員かと思つたのであつたが、何のことはない、警察の御役人樣であつたのだ。

安谷君の部屋の周圍に三つの部屋がある。その三つの部屋にゐた商人達を追ひ立てゝ、今は、御役所の御役人樣が、一室に二人づゝ這入り込んでゐる相だ。僕も調べられた。

『未だ警戒を解いてゐないのですから、今此處へ來た人は、みんな一應檢束することになつてゐる。』と髭をはやしたお役人樣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が僕に云つたけれども、この賢明なる御役人様は、『個人的な用件で安谷君を訪れて來た僕』を檢束しやうとはしなかつた。

僕と安谷君との『個人的用件に就いての話』はいづれ皈つてからゆつくり報告する。

安谷君等の神戸勞働新聞は九月中旬から旬刊として出る相だ。それから、安谷君は、僕等の種蒔き社のために神戸支局を設けて、毎月通信することを約束して呉れた。

安谷君と別れて再び葺合に賀川氏を訪れた。今日は面會することが出來た。がその顚末も皈つてから報告する。

最後に、一人の勞働者が殘殺され、多數の勞働者が傷付けられた例の湊川トンネルへ行つて見た。唯トンネルがあつた。土があつた。血の跡は既に無かつた。が僕は其處に蒔かれてある或るもの丶『種』をハッキリ見ることが出來た！

赤光會便り

S生

稻の波漂ふ八郎湖東岸、七ヶ村の辻々に貼り出された時ならぬビラが人目を惹いた、——新時代に生んとする人は來つて新人の聲を聽け！—「第一回種蒔き社講演會」主催赤光會が好奇の對照となつた。

一九二一年八月二十日、タネマキスト及準タネマキスト十數人、湖東の中心一日市小學校の壇上に突如として現はれた。『種蒔き社同人休憩室』と墨痕麗々しく銘打つた離れの教室に這入ると、小牧、洋文、金中、賢三、吳州、畠郞、近晋、默々、黑木、剎州、不知火の顏が奇跡の樣にずらり集つた。未知の顏、既知の顏、初顏合せや紹介やらで汗んだタネマキストの顏が、無造作に着流した單衣と一緒にあちこち動いて居た。

聽集は二百人を越えた。

■不知火君「石叫ぶべし」と第一聲を擧げた。壇上で叫ぶ君を始めて見た村人は一齊に見上げた。

■近晋君代つて起つた「殘つたものは唯一つ」の標題で「無產者には考へる自由が一つしか殘らない、それだつて……」と初陣に似ず落付き振つて說き下して來ると聽衆に「覔いた皮肉」が張つて仕舞ふ。

■次が畠君例の短氣と卒直が「自分丈けの考」を叫ぶ「僕等が眞險に生產したものをあるものは無駄なことに消費する」と首に手をあてがひ〱「自分丈けの考」丈けでない事實を述べ立てると共鳴の手と聲が盛に起る——「月並、平凡」の殼をぶつかり破つて聽衆の清新の眼と身體が前へ乘り出す。

■「爭」といふ題を見上げた聽衆は更らに壇上の賢三君に目を移す。得意の能舌が巡査が狂人より馬鹿であつた事實の論理に至ると聽衆、殊に多數のプロレタリアは時ならぬ驚異や歡喜やでやん〱と拍手して、そして、ある一隅を見る。君が下りると聽衆の感歎の私語がしばし止まない。

■吳州君の「眞面目な人間」題から態度まで教壇そつくりで、「流行を追ふ不眞面目な社會奉仕連中」を皮肉ると社會奉仕連にぐにやりと頭を上げ得ないものがある。聽衆の眼が又それに集る。「大瞳物に貼膏藥は却つて病人を若しめ危險に陷る、どしても大手術を要する」と結ぶ。

—司會者起つて十分間の休憩を宣す。午時三時十五分—

休憩室へ還ると同人何れもや丶興奮の體、「盛會〱」『成功！』『何人だ！』『二百五十人は突破！』『隣の村が多い、三里位遠くから來てるよ、』なんて問答がある。

■再開に起つた頂州君、開口一番皮肉に出て皮肉に結ぶ。題が「文明の恩澤」先以つ

て皮肉だ。「有難い文明の機械が發明される毎に失業者が増える、はてこれはどんな譯でせう」と首を傾けると聽衆が一様に是を傾ける流にぴつたりと合つた。皮肉のたびに歡聲が起る。「我々種蒔き社の連中は機械が發明される毎に皆が幸福になれる様な世の中を考へてる馬鹿者である」ときめつけた。

■「返すものを返せ」と論理的な題を具體的な事實論で洋文君得意の熱辯二十分で綺麗に酔はして仕舞つた「返すものを返す」べき事實と理論をすつかり呑み込んだ。休憩時間に或る聽衆の一人が小牧君の「巡査、自動車、水呑百姓」の「巡査」が氣になると見えて司會者に尋ねて居た。―

■最後の小牧君が紹介されると聽衆の期待の目が異様に輝く、「巡査が……」といふと或一隅を皆見る「資本家の……」といふと又見る。最後に「水呑百姓が他日食ふに食はれず、騒ぐことがあると水呑百姓を銃殺するものは水呑百姓の子である」と論じて來ること、眞理を見付けた様な表情が誰にも溢れる。

■刹州君の閉會のことばが結ばれると四時三十分。　M　生

古事記神話の新研究に就いて

橘井清五郎

啓上

古事記神話の新研究御惠投被成下一讀興味深く相感じ候貴兄提供の新研究により啓發する所少からず迂弟も今一段強勉を要する事を感じ申候バクトリヤンの貘族なることなどは異議を挿むべき筈なけれども貴兄の最も重要視せられまた此書の發足點らしき鰐の事は迂弟の研究（と云ふ程のことに非ず）とは相隔る幾千里と申すべくゆく貴兄は鰐をほんとのコロコダイルと思はれ居るが此邊などは大違なりと考へ居り候ヒッチト民族など、説く所はあながちけなすべき所にはあらざれども今少し明瞭なる説明法がありそうに思はる。それから人種東漸の動機などもつと面白く誠らしく説明する事實が多く存在する。

命を族又は國體と解釋したのは稍正當に近いけれども命は御門と同じことにて家又は族なりと直接法を用ふるが近路なり。

劔鏡を〇Tにもつて行くはこじつけながら面白し。カルデヤを猿田彦にもちゆくは貴兄の説明としては相當の行き方なり。併し神代の神様の名前を逐一片端よりこの調子で解釋して貰ひたいものに候猶ほ日本の土俗品等にて東西交通の徴證となるべき幾多の品が存在しはせぬかと存じ候

「柱」の言葉に擬を容れたる所は同感に御座候併し此も貴兄の結論に贊成したわけに御座なく候

貴兄が九州と山陰の地名風俗を研究せらるれば大分面白き事實を發見せられ貴兄の學徒をして今一層豊富に面白く説明せらるゝことならんと存じ、迂弟も古事記日本記萬葉などの讀方につき少々ながら自ら發明せるかと信じ居る所あり。

何れ死ぬまでには貴兄の所爲に倣ひ少冊子にでもして見たいと考へ候段々太古史の問題が喧しくなれば我國神代史の編纂法を改訂せなくてならぬやう成るべく神道家連も大分頭痛致すべく候

三四郎氏から

先刻は失禮いたしました。別紙御送附申上ます。筆者は南葵文庫主幹橘井清五郎氏であります。私信を公開するは少々失禮ですが、小生より御詫申すべく、若し之を強て掲載なさるならば私信することを紙上に

チョット御斷り下され度願上ます。(九月六日)

如是閑氏から

上海は通貨の亂脈を除けば一切のもの日本よりもいいやうです。特に人間が好さそうに見える。(上海にて)

漸くここまで漕ぎつけました。毎日の講演で少々閉口罪なくして配所の月を見たいさいふ氣分です。(漢口にて)

雨雀氏から (黑石にて)

その後はおたよりもしないで失禮して居ります。此間は秋田へ行けないのが殘念でした。小生もいろ／＼なさころへひつぱり出されて大分弱りました。脚本も着想中ですが、大難産で悲觀してゐます。實は藝術に對する妙なデスイリユージョンが、この四五年小生の頭を抑へつけてゐるので、書けば、一寸骨折つたものを書きたいさ思つてゐるのです。此方へ來てから、大阪朝日へ童話の連載をたのまれましたが、之れも書けないので弱つてゐます。何處へ行つても人生があるのには一寸驚かされます。たゞ裸かの氣持になれそうで愉快です。「人民の中へ」の氣持が、幾らか自分のものになりかけてゐるやうです。「種蒔く人」にはきつさ何か書きますから御安心ください。佐々木君はもう行きましたか、諸君の元氣のある聲を早くきゝたくなりました。 Ĝis la revido! Sincere Via U.Akita

インテリゲンツイアの僞らざる感想

——中央公論を讀んで——

杉森先生—先生の題目「人的要素の普認さ勞働概念の擴充」の意味が分らぬ如く最後の「社會機能の各部の無自治さ、その各部門の無責任さが、それだのに、現狀」さは何のことか解らぬ現狀です。

林先生—近時の論壇に俄然其頭角を擡んでてゐる先生のことさて、さすがに材料の豐富なことに敬服いたしました。「—嗚呼併しながら、竟に勝利の當事者ではあり得ない」のでせう。

堀江先生—「兩階級を團體的に對立させ、社會の公心を以つて、其間の均衡を維持することを必要さ考へる」さ逃げて居られる「此一事は吾人の飽くまでも留意しなければならぬ點である」のです。

上司先生—先生の申すには「プロレタリアトの專制は、貴族富豪のそれよりも更らに厭やな下品なものかも知れない」さ。ここに於て先生の「趣味の低下を悲む」者であります。

永井先生—これは先生の言そのまゝ「然し今の處我國の智識階級にさうした責任の自覺さ、理解さ、親切さ、勇氣さがない。彼等の多くは無責任で、無理解で、不親切で且つ卑怯である」。恰も永井柳太郎先生のやうに。

本間先生—一寸「覺え書き」までに。先生は超然さした態度でおつしやられる。「そしてその何れを採るべきかは—ブルジョアさなるかプロレタリアさなるか—個々の智識階級者が個々において選ぶべき問題であるこさ云ふまでもない」。そう言ふ本間先生は？

吉野先生—「神戸の賀川君の立場は甚だ尊敬に價するものさ云はなければならない。……澁澤子爵等の功勞も亦看過する事は出來ない。子爵等は誠意を以つて隨分鈴木君の運動を助けたのである」。吉野先生も亦今後さも六月の中央公論の所說さ同樣、勞資の感情融和に努力する「斯くあらん事を吾々は希望する」ものでない。

結論に曰く、杉森先生の前座によつて初めちれた名論卓說は吉野先生の勞資相對厚意のオチにてオカヘリヤス……さるにても上司小劍先生は口さがなき御人かな「安蓄音機の八木節が、其の前觸れをしてゐるやうな氣がする。八木節はおそろし。」さはあなおそろし。(赤 鋒)

靜動——

「勞働者」—九月號を休刊にし捲土重來の意氣を以て十月より續刊。

「關西勞働者」—吉田一君達の努力の下に新らしく大阪市南區空堀十一關西勞働社より發刊。

「神戸勞働新聞」—安谷寛一君等の手により九月中旬より神戸市相生橋際其社より發刊。

「自由人」—加藤一夫君等自由人聯盟機關たる同誌は八月より再興、

「無　名」—八月號を休刊とした同誌は九月から引續き出た。所謂同人雜誌的氛圍氣から漸く脫しかけて來た。

「新詩人」—傳統的詩壇の革新を叫んで立つた民衆詩人の手になる同誌はブルジョア天才の撲滅を期して五月より戰鬪をつづけつゝある。

「日本詩人」—白鳥百田君等の手によりブルジョア詩人に鐵槌を下す可く十月より新潮社から創刊。

「詩　聖」—詩歌を沒却して顧みざる現文壇を革新す可く長谷川、大藤君等の手にて十月より玄文社から創刊。

「炬　火」—沈滯せる現詩壇に炬火を投ず可く川路柳虹君等の「現代詩歌」は上記の如く改題して九月より發刊。

「社會主義研究」—十月號に「ゴータ綱領批評」、堺利彦譯、勞農露國の勞働法が載る。

「社會主義」—編輯者の身邊たる事なりしが、十月號は必ず出る。

「無產社」—曩さに階級鬪爭、農業問題、金持と貧乏人等を出した上名りフレットは新に「女工問題」、「智識階級に與ふ」を出す（—東京四谷南伊賀町六十無產社）

「水曜會パンフレット」—堺、山川横田君等の執筆にて上記のパンフレットは新に平民大學より出版。

「火事と半鐘」—堺利彦著、三德社新刊。

「勞農露西亞の研究」—山川均山川菊榮著、アルス新刊。

「レーニンの社會主義革命の建設的方面」—三德社より近刊。

「相　剋」—長篇小說—住井すゑ子著、表現社新刊。

「相ひ寄る魂」長篇小說—生田春月著。新潮社新刊。

「若き泉」感想—三島章道著、大同館新刊。

「フランス文壇印象記」—吉江孤雁著、精華書院より近刊。

「村の慈善會」—戲曲集金子洋文著、新潮社新刊。

「ふらんす」須川君の手により白水社より創刊。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

創作集

夜あけ前の歌

ワシリイ・エロシエンコ著

□□四六版著著肖像二葉□□定價壹圓八拾錢送料八錢□□

餘りに觀念の乏しい、否寧ろ皆無といつていゝ日本の文壇に、君のやうな美しく燃えた觀念の火を投げるといふことは何れだけ意味のあることか知れない。然し、君は決して觀念の人ではなかつた。君は寧ろいつでも夢の世界に遊んでゐた――（雨雀氏序の一節）

ホイツトマン全集
第一卷
高村光太郎譯

自選日記

四六版
二圓八十錢
送料十八錢

東京市牛込區神樂町二ノ十一　叢文閣　（振替東京四二八八九番）（電話番町四八一二番）

◇主筆 山川均・山川菊榮

社會主義研究

九月號

◇勞農露國の憲法

◇◇無産階級の哲學 日本民衆鬪爭史

有名な『勞働階級の權利宣言』を冒頭とする露國の憲法は、世界史上最初の社會主義者共和國の基礎的構造の規定として、形式内容共に他國の資本家の憲法と全く面目を異にして居る。

本誌は我國に於て初て此歴史的文書の全文を公表した。

◇社會主義の進化 科學の社會主義より實行の社會主義への發達

十月號

◇ゴータ綱領批評（堺利彦譯）

マルクスが一八七五年に書いた此の批評は、其圓熟せる革命思想を表現したものであつて、殊に其中に説いた共産主義の過渡期に於ける無産階級獨裁の必然は露國革命に依つて遺憾なく證明せられ、本篇は初期の『共産黨宣言』の姉妹篇として、社會主義の一經典となつた。

◇勞農露國勞働法 萬人勞働の義務と生活の權利とを規定す

定價 一冊 參拾錢 半年一圓七十錢 一年三圓三十錢

水曜會パンフレット

1 堺利彦述

なまけ者と社會主義

『社會主義の世になつたら人がみんなナマけやしないか』『社會主義の世の中では誰が肥汲みをするか』――かういふ質問に對して眞面目に親切に應答したもの。面白くて有益。

2 山川均著

勞農露國の農業制度

ソヴイエツト政府は農業を社會化するに如何なる政策を取つてゐるか、また政府の政策に對する農民の態度はどうであるか。之を最も要領よく傳へたものがこの冊子である。

3 山川菊榮述

牙を抜かれた狼

面白いお伽噺の中に深刻な思想が含まれてゐる。

4 横田千元譯

勞農露西亞問答

勞農露國の現状に就いて疑問のある人は、本書を開いて自問自答せよ。

――以下續々刊行――

◆各冊定價金十錢 送料五冊迄二錢◆

發賣所

東京大森入新井町

平民大學出版部

振替東京三四一九一番

社會問題批判雜誌

社會主義

每月一回一日發行

一部　卅錢　半年　一圓七十錢　一年　三圓三十錢

發行所　東京麴町區元園町一ノ四四

社會主義發行所

振替東京四二二五四

無産社リーフレット

○階級闘争號（發賣禁止）

○婦人問題

○農村問題

○金持と貧乏人

○勞働運動桃太郎

○女工問題

○智識階級に與ふ

右各部共　一部　一錢。十部　十錢。百部　壹圓

堺利彦、山川均、山川菊榮等執筆。

尚注文は十部以上前金の事。

四谷區南伊賀町六十番地

無産社

振替東京二四六二六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

解放叢書

解放なくして何の人生ぞや。

本叢書收むるところ一として解放精神の發揚にあらざるはなく、解放精神に立脚せる學問の產物たらざるはなし、方今社會生活は資本主義經濟組織の禍惡に毒せられ、一世を擧げて社會不安の瀾底に沈淪し、大衆不滿の聲天地に滿つ。何人か此の暗黑の裡に坐して晏如たることを得ん。吾人は須らく今日の不安より脫し、共存共勞共苦共樂の明日に備へざる可らず。敢言す、萬民幸福の社會建設は先づ解放の精神を基調とせざる可らず。新社會建設の大業に力を竭さんと欲せらるゝ諸君に本叢書を推す。(左記外續刊)

第一編

(1) コール原著 中目尙義譯 勞働組合指針 二・五〇
(2) 山口孤劍著 階級鬪爭史論 二・五〇
(3) ウンターマン著 山川均譯 マルクス經濟學 二・八〇
(4) シュルツェ・ゲーバニッツ著 [illegible]野學譯 マルクスかカントか 二・〇〇

第二編

(5) [illegible] 經濟組織改造 三・五〇
(6) [illegible]原著 [illegible]彦譯 空想的[illegible]學的社會主義 二・〇〇
(7) [illegible]義譯 ボルシ[illegible]ヰズム批判(原過激派の本領) 二・二〇
(8) レヴィンスキ著 貴島克已譯 財產起源論 二・〇〇

第三編

(9) リー教授原著 暉峻義等譯 生理學上より見たる勞働者問題 二・五〇
(10) ゴルテル原著 堺利彦譯 唯物史觀解說 二・二〇
(11) クロポトキン著 遠藤友四郞譯 近世科學と無政府主義 二・二〇
(12) 堺利彦 山川均 共編 マルクス傳(附エンゲルス傳) 二・八〇

第四編

(13) ロイド原著 荒畑勝三譯 勞働組合論 二・五〇
(14) 高畠素之著 社會主義的諸研究 二・五〇
(15) フランツ・オッペンハイマー著 岡上守道譯 國家論 二・五〇
(16) カーペンター著 山川菊榮譯 戀愛論 二・〇〇

第五編

(17) フレーゼー原著 岡田甲子之助譯 立憲的工場組織 二・五〇
(18) テーラア原著 新明正道譯 ギルド國家論 二・〇〇
(19) 高畠素之著 マルクス學研究 二・〇〇
(20) [illegible]法學[illegible]工師一著 勞働問題の現在及將來 三・二〇

東京京橋桶町・大阪三休橋南
株式會社 大鐙閣
振替(東京三三六八 大阪二七二五)
電話(東京二二三 南 一八〇三)

◆送料各冊十二錢◆

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

レーニンとトロツキー

好評七版

山川均著

◇定價壹圓九拾錢送料十二錢◇

「怪物は全歐羅巴を惱ましてゐる——共産主義の怪物！」。之はマルクスの有名な共産黨宣言の一句である。然るに今や此共産黨の怪物は、全世界を惱ましてゐる。大破壞と大改造の旋風は、全世界を吹き捲くつてゐる。そして此大旋風の中心に、忽然と姿を顯はしたものはレーニンとトロツキーであつた。彼等は怪物であるか、狂人であるか、野心政治家であるか、モッブの煽動者であるか、獨逸の探偵であるか、それとも前代未聞の空想家であるか。彼等の隱れたる過去は如何。彼等の行動と事業は如何。彼等の思想と人物と風丰は如何。疑問の人物を拉し來つて讀者の前に躍如たらしめたものは本書である。本書は日本の讀書界に現はれた最初のレーニン及びトロツキーの人物研究であると同時に、露國革命の側面的研究として、大なる價値を有することを疑はぬ。

東京芝櫻田備前町
振替東京八四〇二
改造社

編輯後記

創刊に際して僕たちは内外執筆家、同士並に各方面の諸氏の聲援を感謝するものである。僕たちはは雑誌にかけては全くの素人であつた。

「種蒔く人」といふ小冊が今年二月土崎港に印刷されたことがある。そして、それが第三インターナショナルの研究と、又主義的文藝ものともつかぬ色彩を帯んだものであつたが、三號をもつて打切つた。これらの小冊は今全部賣切になつてゐる。

「種蒔く人」は僕たちと主義を同うするもの・寄稿通信を歡迎する。そしてとくに地方の實際生活を知り又國情での聯絡を計るために地方欄を設けた。

「種蒔く人」を廣く讀ませることは凡ゆる意味に於て種蒔くものである。「種蒔く人」の仲間の仲間は「種蒔く人」の仲間である。

[illegible]の『比叡の雪』の二部が『[illegible]』[illegible]號に掲載されたことがある。[illegible]の後編をもに、その全編を[illegible]ほしたる。尚は同君は次號のため小説執筆中である。[illegible]月だ。

海外の大諸々友は大分ロシアの大會から歸つた樣子である。目下滯佛中の林倭衛の通信とともに、一段の色彩を添へることであらう。

種蒔き社はその事業の一つとして、海外の世界主義的傾向の文藝ものを翻譯することにしてゐる。そして最初の事業として、正倹、孝丸はアンリ・バルビュスの「光」及び「地獄」の翻譯に着手した。尚は青江孤雁はバルビュスから依頼された「砲火」の翻譯を種蒔き社に委任した。

松本淳三の「双の剥れて」は[illegible]で國粋會の徒輩に刺された時の實感である。

沼田流人の小說は[illegible]の紹介によるものである。

種蒔き社は「水曜會パンフレット」及び「無産社パンフレット」等の注文に應ずる。

種蒔き社に[illegible]、エスペラントの研究會を開いた。

[illegible]

來月は[illegible]

定價	一部[illegible]
廣告	廣告及[illegible]本社宛[illegible]
宛先	寄稿、通信、[illegible]其他本誌に關する一切の[illegible]種蒔き社宛
締切	每月五日

大正十年九月廿九日印刷
大正十年十月三日發行
[illegible]
發行所 種蒔き社
大賣捌 [illegible]